

Stage Eleven

「誓いの剣」

Stage Eleven

「報告！ 仰せのとおり、反乱軍が現れました！」

漆黒の鎧が音を立てて振り返った。面貌の奥に暗赤色の灯が動いたが、伝令はそれに気づかないふりをする。彼と目を合わせなければ生きていられるというのがこの役を押しつけられた者たちの知恵だ。だがそれも明日は変わるかもしれない。ガレス皇子の気分など、誰にも計ることはできやしない。

「殺せ。反乱軍は皆殺しにしろ。足りなければ本国より援軍を送らせる。反乱軍はこのシャングリラで足止めだ」

「ははっ！」

「いや、待て」

急いで立ち去ろうとした伝令は、へまをしたかと、恐怖に全身の筋肉が引きつる思いがした。

「反乱軍のリーダーはいるのか？」

「はっ。確認されております」

「そいつだけ生かしたまま連れてこい」

「生かしたまま、でございませうか？」

ガレス皇子の真意を汲み取りかねて、つい問い直してしまふ。

「そうだ。四肢の骨が折れていようがかまわん。だが無くなっているのは駄目だ。死んでいても駄目だ。貴様らに、あいつをなぶ斃り殺しにする楽しみは与えん。あいつは俺の獲物だ！」

「かしこまりました！」

退室し、急いで遠ざかりながら、伝令はガレス皇子の発した狂気から逃れようとした。あの黒騎士ガレスにそこまで憎まれる反乱軍のリーダーとはいかなる人物なのか、彼には想像もつかなかった。

一方、一人に戻ったガレス皇子は、漆黒の鎖籠手をつけた手で、面貌をわしづかみにして身体を揺らしていた。

「くつくつくつく。やはり来たな、ガルシア。アヴァロン島で会った時はまさか貴様だとは思わなかったが、反乱軍というお遊びもこれで終わりだ。貴様のあるべきところを思い出させてやるぞ！」

鎧の軋む音は廊下にまで響いた。

しかしそこに控える部下たちは知っていた。ガレス皇子の機嫌の良い時、それは何の前触れもなしに人が

殺される時だ。両手持ちの戦斧で誰かの首がはねられる前兆なのだ。

「グランディーナ、おまえは引つ込んでろ！」

カノープスは飛び上がり、振り下ろされた鎌を楯で受けて跳ね返した。しかし、暗赤色のデーモンは一匹や二匹ではない。たとえグリフォンに乗っていても、彼らと戦うのはランスロットたちには荷が重かるう。

デーモンにもわかつているらしく、耳元まで裂けた口に醜悪な笑みが浮かぶ。だがそれも一瞬のこと、サラディンの放った紅蓮の炎が空中を駆け抜け、わずかに遅れて、魔術師たちの唱えた魔法も襲いかかる。

ところが、デーモンに続いて現れた敵に皆は驚き、手を止めずにいられなかつた。

純白の翼に衣、藤色の髪を垂らし、五バス（約一・五メートル）以上もある十字架を掲げた天使たちだつたからだ。

「天使長ミザールのなした誓約により、あなたたちを敵とみなします！」

現れた天使は九人いた。九本の十字架が向けられたのはどれも別々の方向だったが、彼女らは一斉に同じ言葉を唱えた。

「誓約によりて我らが敵に神の裁きを与えん！ 消滅せよ、バニツシュ！」

「うわあああつ！」

天使は神の使いである。ロシユフォル教の最高神、ファイラーハに仕えるのは六枚の翼を持つ天使長ミザールであり、その姿は教会を飾る着色硝子にも好んで描かれる。さらにミザールに従う天使には二つの階級があつて、上位の天使をスローンズ、下位の天使をエンジェルと呼んで区別する。この場に現れたのはスローンズであつた。

だから、皆が天使に反撃できなかつたのは、実在するものと思つていなかったことと、彼女たちが天使長ミザールの名を口にしたことで、自分たちの戦いに疑念を抱かされてしまったためでもあつた。

「戦え！」

「きゃあああつ！」

その時、スローンズの一人を剣が貫いた。彼女は地面に崩れ落ちたが、その身を足蹴にしてグランディーナが剣を取り返す。

「いまさら私たちの戦いが神の意に反するものだからといって、あなたたちはゼテギネア帝国の支配に甘んじられるのか?！」

彼女の足下でスローンズは消滅した。その断末魔の苦悶した表情は、彼女らの存在の確かさと同時に、帝国と戦うためならば、ファイラーハ神にも弓を引きかねないグランディーナの意志の強さと、実際にそうすることの恐ろしさをも見せつけていた。

しかし彼女は畳みかけるように続ける。

「戦え！ 天使であろうと悪魔であろうと手向かう者は敵だ！ 敵と戦う意志のない者はいますぐ解放軍を去れ！」

「神をも恐れぬ不屈き者め！ 神の裁きを受けるがいい！」

だが、八本の十字架が揃ってグランディーナに向けられるや否や、悪霊の群れと雷が、立て続けに彼女らに襲いかかった。

「ぎゃあああつ！」

悪霊を召喚したのはサラディン、雷を撃つたのはラウニーだ。

「あなたもたまにはいいことを言うじゃない！ 天使だからって黙ってやられる道理はないわね！」

その言葉に皆はようやく我に返り、デーモンとスローンズを次々にしとめていった。

しかしデーモンも、スローンズのように倒された姿

を残すことはなく、すべての敵を倒した時には、傷ついた解放軍が残されているのみであった。

「モーム、負傷者の治療と報告を！」

カリナ、ユーリアは見張りに立て！」

「了解！」

グランディーナの指示が飛ぶと、皆は自然と負傷者と治療部隊を中心に円陣を組んだ。

金竜の月十八日、解放軍はアラムートの城塞の南方に発見したカオスゲートから天空の島の一つに至った。すでに帝国軍が先行していることはわかっていたが、カオスゲートを出たところでは待ち伏せを受けなかったのだ。

デーモンとスローンズの混成部隊が襲ってきたのは、グランディーナの指示で皆が五人ずつの小隊に分かれて散開しようとしていた矢先のことであった。

誰もが改めて、ここが天空の島という異世界であり、慣れ親しんだゼテギネアではないのだという思いを新たにしていた。

だが、スローンズの発した天使長ミザールの名は決して軽くない。皆がゼテギネア帝国と戦うという意志と理由をもって参加した解放軍ではあるが、特に今回

が初めての戦場という者たちを筆頭に、この戦いへの正当性を疑う心が鎌首をもたげつつあった。

「グランディーナ、天使たちの言葉、おまえはどう考えるのだ？」

「どうもこうもない。天使だろうと悪魔だろうと帝国に汲みするならば敵だ。それを敵に黙ってやられる法があるか」

「だが天使長ミザールは最高神ファイラーハの使い、それが万が一にもゼテギネア帝国を支持しているとなれば、我々の戦い、これからロシュフォル教会はもとより民衆の支持を得るのも難しくなるだろう」

「ファイラーハがゼテギネア帝国を支持しているのなら帝国のやり方を受け入れられるのか？ あなたは神が右を向けと言えば右を向くのか？ そんな戦いならば辞めてしまえ。ゼテギネア帝国を倒す。それが解放軍の目的だ。成し遂げる気がないならば去るがいい」

「そう急いで結論を出すこともあるまい。天使長ミザールの名が即、ファイラーハ神とは限らぬ可能性も考えてみなくてはな」

「どういう意味だ？」

「スローンズたちは最初にこう言った、『天使長ミザールのなした誓約により』と。その誓約をなした相

手がファイラーハ神とは限らぬということだ」

「帝国教会では最高神はエンドラさまという事になってるわ。だけど天使長が神ではなく、エンドラさまと誓約を交わすなんてこと、あり得るかしら？」

当の帝国教会の最高位にいたはずなのに、ノルンの言い方はまるで他人事だ。もつとも法皇と言つてもその上には賢者ラシュディがおり、現人神となった女帝までいる。実情は知らされていないのだろう。そして彼女がなぜ天空の島に來たかといえは、単にアラムートの城塞での暮らしが退屈になり、遠征軍にラウニーが加わっているからにほかならなかつた。

「ないとは言いい切れぬし、相手が女帝ではない可能性もある。天使たちの攻撃が即、ファイラーハの命令とは限らぬということだ」

「だが肝心のミザールに確認してみない限り、ファイラーハの介入も否定しきれないということだな？」

皆の安堵に水を差すようにグランディーナが反駁したが、サラディンもそれまでは否定しなかつた。

「やがて見えることになろう。だが、もしもおまえの言うとおりでとすれば、天が我々、人間たちの戦いに介入する理由も知らねばなるまい。二四年前の大戦で天はどちらの味方もしなかつたのだからな」

「グランディーナは立ち上がり、ランスロットが続くとするのを制した。」

「影が戻った。あなたたちはまだ休んでいろ」

しかしサラディンは続こうとせず、瞑想するかのように目を閉じる。

グランディーナが影の報告を聞く時、誰かを同席させることは滅多にない。そういう意味ではサラディンもまた特別扱いというわけではないらしい。

それに、先ほどのやりとりは明らかに皆に聞かせるもので、グランディーナもそのことは察していた節がある。特別扱いではないが、やはりサラディンの立場は特別なものになるようだ。

そこまで考えたランスロットは、ふと目を合わせたカノープスと同じようなことを考えていたらしいのを察したが、彼は笑ってみせただけだった。

しばらく経ってグランディーナが戻ってきた時、右腕を吊った三角巾にどす黒い血が四ヶ所ついているのをカノープスが真っ先に見つけた。

「おまえ、影と会ってただけじゃないのか？ 何だ、この怪我は？」

「血は止まつてるから後でいい。それよりもあな

たたちに伝えることがある」

カノープスは彼女の言葉を無視してアイーシャを手招いたが、次に聞こえてきた名にはさすがに言葉を失わざるを得なかった。

「帝国の将は黒騎士ガレス、この島は天宮シャングリラだ」

「何だつて?!」

「ガレス皇子はアヴァロン島で倒されたのではありませんか？」

「倒したつもりだ。だがわたしたちが戦ったのは空っぽの鎧で、再戦を宣言していったからな」

「ガレス皇子の地位を考えると、影武者ということはないのか？」

「違う。あれはガレス本人だ」

「だったらどうする？」

グランディーナは皆を下がらせ、剣を抜いた。地面にいびつな丸を描き、何ヶ所かに印、最後は中央に二重丸を描いて、元のところに戻った。

それで皆が円の周辺、あるいは見えるように集まってきた。

「これが天宮シャングリラだ。ここが現在地」

と自分の足下を指す。次にちようどはす向かいに

立つたノルンの足下を指して、

「そこがガレスのいるシャングリラ城。ほかの印は町と考える。位置は正確ではないがな」

「ずいぶん町が少ない気がするが、その二重丸は何だ？」

「この島を南北に分断するヴィンタートゥール山地、真ん中がルガノ湖だ。天空の島といってもゼテギネアとそれほど変わらないらしい」

彼女がそこで言葉を切ったので、皆はシャングリラの全体像を見直した。だが確かにカノープスの言うとおり、町が少ない。すぐ近くに見える町はいいとしてもシャングリラ城まで二つしかない。

ランスロットがそのことを指摘しようとする、グランデイーナは手を振って遮った。

「今回は部隊を分けない。敵が初めてデーモンやスローンズを使ってきたのも天空の島だからと片づけるのは危険だ。ガレスが将というのも気になる。帝国は我々より先行しているし、ラシュデイもいたはず、今回は中央突破のみだ。質問がなければ、エルシリアから行くとしよう」

帝国軍の手に落ちた天宮シャングリラだったが、幸

いカオスゲートに最も近いエルシリアの町は支配が厳しくなく、すぐに解放軍に門戸を開いた。

だが、解放軍を出迎えた町の代表はお世辞にも友好的とは言えず、反感は示さないまでも、その態度には解放軍も帝国軍もひつくるめて、地上の人びとへの蔑視がはつきりと伺えた。

「地上の争いを持ち込まれて、わたしたちは大変迷惑しております。わたしたちの祖先はいつまでも止まぬ地上の争いを憂えて天空の島に上ることを許された人びとです。わたしたちは争いに争いをもって解決することができませんし、その手段も力も持つておりません。あなた方が帝国軍と名乗ろうと解放軍と名乗ろうと、わたしたちにはあまり変わりありません。

この天空の島での争いを終結して、速やかに地上に戻ってください」

「この地での争いを長引かせるのは私たちにも本意ではない。私たち解放軍は帝国軍を倒したら早々に撤退するつもりだ」

「当然です。地上の方々には、たとえ一人たりとも残っていただきたくありません」

「承知している」

そう言うと、グランデイーナは頭を下げた。

「このたびのことは、地上を代表してお詫びする。ゼテギネア帝国を一日でも早く倒すことが私たちの願いだ」

「倒すなどと、なぜあなたたち地上の方々は簡単に戦うのですか？ ゼテギネアという帝国といえど道理がないわけではありませんまい。あなたたちには話し合うという道は最初からないのですか？」

「地上には地上のやり方がある。天空の島のやり方で口を挟まないでもらいたい」

彼女が立つと町長も負けじと立ち上がったようにランスロットには見えた。グランディーナの言葉に彼が気を悪くしたのは間違いない。

サラディンは終始、沈黙を守り、三人は揃って町長の家を辞した。そうは言っても、ここだと教えられなければ、とても町長の家だとわからなかつたろう。

「地上の者たちはもう二四年も帝国の圧政に耐えてきた。いまさら話し合う余地などないと言えば良かったのだ」

サラディンの言葉に、グランディーナは苦笑いを浮かべた。

「わかっていたが、上からの物言いをされたから言い返したくなつた。これで町々の協力が期待できなく

なつたかな？」

「元々、望みは薄かつたろう。彼らは戦うという選択肢をとるの昔に棄てた人びとの子孫だ。帝国のやり方も受け入れまいが、解放軍の思いも理解はずまい」

彼の言葉を証明するかのように、人びとが三人を避けていく。

ランスロットは鎧こそ脱いでいたが、剣を手放す気にはなれなかつたし、サラディンも杖を携えたままだ。ましてやグランディーナが身体から剣を放すとはどうてい思えない。

「ですが、人が戦いを棄てられるとは驚きです。そのような町や国があるなど、地上では聞いたことありませんから」

「ここシャングリラには正義の女神フェルアーナがおわす。人びとがいままも戦いを棄てていられるのは、女神のお膝元のためもあるかもしれない」

「女神にはそんなに気軽に会えるのか？」

グランディーナには珍しく興味のありそうな顔で振り返った。

「そうではない。女神に会うにはそれなりの資格が要る。誰でも会えるものではないのだ。だがシャングリラはそもそも島全体がフェルアーナに捧げられた神

殿とも聞く。女神に近いというのはそういうことだ」

やがて彼女たちは町の外に出ていた。

地上の町に比べてエルシリアには外壁がない。ランスロットには、それは開放感とも無防備とも写った。

地上にはそんな町や村は数えるほどしかない。隠れ里のゼルテナにさえ柵はあった。戦いを棄てるということとは決して一つの町でできることではないのだと彼は気づいた。

三人の帰還を待つて、解放軍は進軍を開始した。

何事もなければ、シャングリラ城までは二日ほどだということだ。

「敵襲！」

火の玉を喰らつて天幕が燃え上がった。中から飛び出してきたモームⅡエセンスが急いで火を消し止めようとする。

鎧をつける間もない。武器だけ持ち出すのが精一杯のところ、いくつもの魔法陣が出現し、その内側にいた者に暗黒の洗礼を浴びせかけた。

「きゃああああ!!」

「ランスロット、無事か?」

「わたしは大丈夫だ、だが——」

「怪我人なんかにかまうな! ブリユンヒルドを抜け!」

ランスロットが言われるままに聖剣を抜き放つと、ブリユンヒルドはすべての闇を打ち払うがごとく燦然と輝いた。

「ゼテギネア帝国に仇なす反乱軍め! 我ら、ガレス皇子の親衛隊が始末してくれるわ!」

両手持ちの斧を構えた漆黒の騎士が次々に斬り込んでくる。

彼らと斬り結んだランスロットはブリユンヒルドがひととき強烈な光を放ち、鎧を易々と切り裂くのを見た。手応えはまるで紙のようだ。数百年ぶり、あるいは数千年ぶりに戦場に現れた聖剣は、彼の手の中で唸るような勢いで敵を切り裂き、倒してゆく。

その時になつて、ようやく解放軍のなかから反撃の魔法が飛んだ。

「一ヶ所に固まるな! またイービルデッドの餌食になるぞ!」

グランディーナが皆に檄を飛ばして廻る。

ガレス皇子の親衛隊を名乗った黒騎士が彼女に追いつがろうとし、チェスターⅡモローやステイングⅡモートンらに阻まれた。

ランスロットもそちらに加わろうとしたが、ドラゴンの吠え声を聞いたような気がして立ち止まった。

野営地に出現した魔法陣がイービルデッドだということはわかっていて、それを放ったのが闇竜ティアマットだったのだ。

その姿はかがり火に照らされてなお黒く、闇の中にさらに濃い影を落とす。破壊神リュングヴィの加護を受け、言葉を操れなくても暗黒魔法イービルデッドを放つ。そのティアマットが六頭も出現したのだ。ランスロットは思わず手が震え、聖剣を握り直した。

「おまえ一人に任せるわけにはいかねえからな！」
カノープスとカリナⅡストレイカーが彼の両脇に揃って降り立った。

「相手はティアマットだぞ、怖くないのか？」

「怖くねえって言っちゃあ嘘になりますけど、ホークマンてのは相手が強いほど血もたぎるんでね」

「それに、どうやらこいつらに立ち向かえるのは俺たちだけらしいぜ」

「承知した！」

彼らがティアマットに斬りかかる寸前、雷が東になつてドラゴンに襲いかかった。

「さすが聖騎士、実力は本物だな！」

「褒めても何も出ないわよ！」

「槍を振るつてくれるだけで十分さ！」

ティアマットとの戦いでまたしてもランスロットは紙を切り裂くような手応えを味わった。

ドラゴンの鱗は歳月を重ねるごとに厚く堅くなるという。ましてやティアマットは上級ドラゴンだ。その鱗はたいがいの鎧よりもよほど頑丈で、ドラゴンが強い理由の一つには、攻撃力よりも防御力が上げられることが多いくらいなのだ。それがブリュンヒルドにかかるとたやすく切り裂かれてしまう。そのことは、ラウニーの持つオズリックスピアが苦戦しているのを見ても明らかだ。聖剣ブリュンヒルドは魔性のものに恐るべき威力を発揮するようなのだ。

黒騎士たちを撃退したチェスターたちがやってきた時、最後のティアマットがラウニーとカリナの攻撃で倒れたところだった。

四人とも思わず皆が絶句するような姿になっていた。ティアマットが吐き出す酸の息で衣服は襤褸ぼろ同然、返り血は真つ黒で凄まじい臭いを放っていたからだ。

「ラウニーさま、なんてお姿に！」

ノルンには珍しく大慌てで彼女をシートでくるむ。

「私は大した怪我じゃないわ。それよりも彼らの方

を診てあげてよ」

「ですが、まずはお身体を洗ってお着替えなさいませ。酷い臭いでも、御髪おみかみを傷めてしまいますわ」

そこへ、ちょうどよくグランディーナとモームが現れたので、ノルンはまだ何か言いたそうなラウニーを引つ張っていった。

「苦勞くろうだったな。あなたたちのおかげで黒騎士も撃退した」

「怪我人は？ みんな、無事なのか？」

「皆様のことよりも、まずはご自分の身を案じられたいかがですか、ランスロットさま？」

「いや、わたしは大丈夫だ。大した傷は負ってない。カノープスとカリナを診てやってくれ」

「でも、酷い血です」

「ティアマットの返り血を浴びただけだ。わたしも血を洗い流してくるよ」

皆が不思議そうな声を立てるのをランスロットはうるさく感じて、強引に立つた。いまになつて猛烈な疲労を覚えたせいもある。松明をかざして水辺まで案内してくれたカシムⅡガデムの親切も、ありがたいのになぜか鬱陶うっとうしいと思つてしまつたぐらいだった。

「カノープス、何があつたのか説明できるか？」

ランスロットが遠ざかるのを見送つてから、グランディーナが口を開く。

「何なんて、ご大層なものじゃねえ。ティアマットを倒しただけだ。ただし三頭はあいつの手柄だ。俺たちは一頭ずつ倒すのが精一杯だったってだけさ」

「ティアマットを三頭も一人で？」

その場のほとんどの者が信じられないという声を上げた。ランスロットの剣の腕は、解放軍内ではグランディーナに次ぐというのは誰もが認めるところだが、それでもティアマットを三頭も倒せるとは思えなかつたからだ。

ドラゴンというのはそれだけ強い。数ある魔獣の中でも別格であり、だからこそ、そのドラゴンを意のままに操る竜使いの力は重宝される。しかもランスロットたちが戦つたのはただのドラゴンではない。闇竜ティアマットは人が容易に操れるものでもなければ、一対一で対等に戦える相手でもなかつた。

「だけど、あれはあいつの戦い方じゃねえ。戦つてるのは剣で、あいつは手を添えていただけだ。グランディーナ、おまえ、最初からこうなるって知つていたんだらう？」

彼女は切り口のきれいなティアマットの首を持ち上げていたが、放り出すとカノープスの方を振り返った。

「予想はしていたが予想以上だ。あなたたちも、まさか彼にカオスゲートを開けるだけの物を渡したのだとは思っていないか？ それに剣に振り回されるうちはランスロットの腕も未熟だ。そうではないのか？」

「確かにおまえの言うとおりかもしれないが、気に入らねえな、そういうのは」

「だがブリュンヒルドは切り札になる。ランスロットが辛いと言うのなら、チェスターとの使い回しでもかまわない。ブリュンヒルドを前線から下げるわけにはいかない」

「あいつのことだ、剣を渡すのは嫌だって言いそうだけだな」

「できるようならば預けておく」

それから彼女は皆を振り返った。

「あなたたちもう休め。明日は予定どおり、ルツェルンを目指す」

「カリナ、俺たちも身体を洗いに行こうぜ」

「大将、この臭い、しばらく取れませんかよ」

「だからって、香水を振りかけるわけにはいかねえだろう！」

「そんなあ」

カノープスとカリナが川辺に行くと、無防備にもランスロットが寝呆けていた。両足を川に突っ込んで、二人が来たことにも気づかぬ様子だ。聖剣ブリュンヒルドは罰当たりなことに鞘ごと脇に放り投げてある。

「こんなところで居眠りしているとグランディーナにどやされるぞ」

「大丈夫だ。何かあつたら剣を取れるぐらいには回復した。君たちこそ、こんな時間にどうしたんだ？」

「何って、おまえと同じだ。ドラゴンの血を流して来たに決まってるじゃねえか」

「そうか。みんなはどうしてる？」

「休んだんじゃねえか。明日は次の町を目指すって言ってたぜ」

「わかった」

ランスロットは起き上がり、ブリュンヒルドを腰に提げ直した。

「さつきは格好悪いところを見られてしまったな。

いくら聖剣とはいえ、騎士が剣に振り回されるようではわたしもまだまだ未熟だな」

「グランディーナと同じことを言うなよ。だけどあいつは聖剣を前線から下げる気はないとも言ったぞ。」

おまえ、大丈夫か？」

「わたしも一度任された以上、誰かに譲るつもりはない。グランディーナの利き腕が復活すれば、話は別だろうがね」

「言うんじゃねえかと思ってたよ」

「わたしの性分だからな。だけど正直言って、今晚のように振り回されていたのでは駄目だな。疲労も酷かったし、最悪だ」

「じゃあ、おまえが強くなればいいんじゃないか？」

「簡単に言ってくれるな」

「あいつも、まさか俺に剣を持たせようなんて思わないだろうからな。代役に上がった名はチェスターだけだ。だけど、その剣を使いこなすのは難しそうだな。さっきのおまえを見てたら、そう思ったよ」

「こちらの意志とは関係なしにティアマットの方に引きずられたからな。もともと魔の物を倒すために鍛えられた剣ではないかと思うんだ」

「まあ、聖剣というぐらだからなあ」

そんな話をしているあいだにも東の空が白々と明るくなってきた。

「長い夜だったな」

「ガレス皇子を倒すまでは、厳しい戦いが続きそう

だな」

「頼りにしてるぜ」

肩をこづかれてランスロットが笑い出したので、カープスもカリナもつられて笑った。

もつとも解放軍の現状は、とても笑っていられるようなものではなかったのだが。

ティアマットの先制を許したことは、解放軍に大勢の負傷者を生んだ。せめてもの幸いは、イービルデッドの威力がガレス皇子ほどではなく、魔法陣も集中しなかったので重傷者が出なかったことだ。

昨日のうちに解放軍はヴァインタートウル山地に入っていた。道は山間を細く長く続いていく。高さはセムナン山地ほどなく、上り下りの繰り返しだ。

こういう道は待ち伏せされやすいが、前方にカリナ、後方にユーリアがグリフォンで飛行しており、加えて影の先行もあつて、そう簡単に奇襲を受けないように配置されていた。

「グランディーナ！」

そこへユーリアがエレボスを駆つて下りてきた。

合図で全軍がゆるゆると停止し、カリナや影にも止まるよう指示された。

「ルガノ湖の真ん中に島があったのだけど、そこにおかしな建物を見つけたわ。ロシュフォル教会の尖塔ぐらいの大きさだと思っただけど、入り口が見当たらないし、人もいないの。怪しいと思わない？」

「確かに気になるな」

グランディーナがサラデインを見ると、彼も頷いた。

「おいおい、たとえ帝国軍がいなかったって、おまえたちだけで行かせられるわけがないだろうが」

「だからといってブリュンヒルドを本隊から離すわけにもいくまい。」

ランスロット、あなたはこちらに残れ。

グリフォンを一回借りていく。チェスター、今朝の話どおり、ルツェルンの手前まで進んでおけ。ヴィンタートウル山地を抜けても、カリナとユーリアの見張りは続行させろ。私たちも塔の調査が済み次第、合流する」

「承知した。サラデイン殿とカノープスが一緒だ。万が一もないと思うが、気をつけて行かれよ」

彼女は頷き、カノープスが引いてきたピタネにサラデインと乗り込んだ。グリフォンは一緒に来た二頭が飛んでいるもので自分も飛びたくてしようがなかったようだ。珍しくカノープスが言うことを聞かせるのに

苦労していた。

「おい、グリフォンが足りねえぞ」

「こちらの見張りを疎かにするわけにはいかない。

あなたには飛んでもらう」

「げっ、そう来たか」

しかし、彼が飛ぶ気満々なのは誰が見ても明らかだ。グリフォンが飛び立つと、カノープスも真紅の翼を広げて追いかけていった。

チェスターが出発の合図を出したので、解放軍は動き出した。

アイーシャは案ずるように飛び去ったグリフォンをいつまでも見送っていたが、ランスロットに促されて、ようやく歩き出す。

「チェスターの言うとおり、サラデイン殿とカノープスが一緒だ。案じることはないよ」

「ですがランスロットさま」

言いかけてアイーシャは口をつぐんだ。解放軍では数少ない未成年だが、同い年のミネアと違って彼女は時々、驚くほど大人びた顔をするところがある。大神官の娘という立場や、ロシュフォル教会の大聖堂で生まれ育ったという環境もあるのだろう。減多に自分から意見を言うことはないが、ランスロットは彼女に決し

て周囲に流されない意志の強さを感じることもあつた。司祭なので戦う手段は持つていないが、アイーシャもまた単に守られているだけの存在ではないのだ。ランスロットが彼女の肩を軽くたたいて微笑みかけると、アイーシャは彼をいたわるような笑みを返した。本隊から遅れたことに気づいて、二人は急ぎ足になる。地上と変わらぬ夏の日差しが、このシャングリラをも照らしていた。

グランデイナーたちはカノープスのために遅く飛んだものの、それでも小一時間と経たないうちにルガノ湖中央の島を見出し、建物に近づいていた。

確かにユーリアの報せたとおり、ロシユフォル教会の尖塔のようで、三角屋根が乗っている。それを見てカノープスが真つ先に思い出したのは、ユリマガアスで見た不思議な塔群だ。ただしあれよりずっと太く、土で汚れているのは確かにおかしい。周囲の土の盛り上がり方も不自然だった。それに太さのわりに背が低く、カノープスの翼より、ほんの一バス高いぐらいだ。だが、壁が白亜で塗られているように見えるのは同じだし何より入り口も窓もない形がそっくりだ。

そしていちばん目立つのは、建物全体が北の方に傾

いていることだった。

「グランデイナー、おまえ、ユリマガアスで光のベルを取る時に建物に入つちまつただろう？ 今度も同じようなわけにはいかねえのか？」

「どうだろうな」

しかし彼女はすぐに試してみようとせず、サラデインの様子をうかがっている。

彼は建物の北側の面に向かって立つと、杖を構えて何やら呪文を唱えているようだ。その額に脂汗がにじんで、眉間の皺がいよいよ深く刻まれる。

だが、それ以上のことも起こらず、カノープスは拍子抜けした。

しかも、サラデインは今度は南の面に向かって同じような行動を繰り返すと、カノープスの予想どおり、西の面、東の面に同様のことをし、結局、何も起きないままであつた。

彼は息を荒げて腰を下ろした。

グランデイナーが三角巾で汗をふいてやるのを見ながら、彼女なりに気を遣っているのだろうが、その三角巾はお世辞にもきれいとは言えないかとカノープスはどうでもいいようなことを考えていた。もちろん、見張りの役目は怠っていない。

「ラシュデイ殿に開けられぬものを、わたしにできるはずがなかったな」

「ラシュデイがここに来たつていうのか？」

サラデインは杖にすがつて立つと、北側の壁の焼けこげた痕を指し示した。

「この建物はたいがいの魔法を受けつけぬ。見かけよりもよほど強固に守られていて、わたしのかけようとした魔法も全てはねつけられた。おそらく、わたしではこのような傷をつけることもできない」

カノープスは焦げ痕を眺めた。魔法のことがわからぬ彼には松明でも押しつけたとしか思えない。

だがサラデインはそれがラシュデイによるものだといい、グランデイナーも異論を挟まなかった。

「で、天下の賢者殿でも開けられないなんて、こいつはいつたい、どういう代物なんだ？」

「確たることは言えぬ。だが、わたしの推測を言わせてもらえるならば、女神フェルアーナの本神殿ではないかと思う」

カノープスはいささか驚いたが、グランデイナーはやはりサラデインと同意見のようだ。

「それにしちやあ、ずいぶんとお粗末な建物だな。もつと地中にあるのかもしれないけど」

「神を祀るのに神官が必要とか、豪華な神殿が必要という考え方は後からつけ足したものだ。人びとが自分の好きなように神を拜んでいては都合の悪いと思つた者が、人びとを統制するために始めたのが宗教団体だ。見てくれの豪華さもつけっようなお題目も神には意味がない。この建物はそなたの言うとおり確かに小さいが女神が十分だと思わぬとは誰にも言えないのだ」

「だけど、確か天宮シャングリラ全体がフェルアーナの住む神殿だつて話じゃなかったか？ この建物とシャングリラ城の違いはどこにあるんだ？」

「地上で我々がロシュフォル教会に通うのは神に見えるためか？」

「俺は教会なんて行つたことはねえが、たぶん、違うんだろうな」

「シャングリラ城には別の意味があるのかもしれないが、天宮シャングリラをロシュフォル教会と同様に考えれば、辻褄は合う。あくまでもわたしの推測にすぎぬがな」

その時になつて、ようやくグランデイナーは建物に触れた。塔の高さがさらに低くなつていたが、カノープスも、もう驚かなかつた。

「サラデイン、これがフェルアーナの本神殿と仮定

してだ。この建物を地中から引つ張り出し、何のため
にこじ開けようとしたのだと思う？」

「仮定ばかりで確たることは言えぬが、女神に会お
うとしたか、ここに隠された物を探していたか、どち
らかに絞り込むことはできるかもしれない」

「女神に会って何とする？ 帝国教会は女帝を最高
神とする。正義の女神といえど下位神に過ぎない。い
まさらフェルアーナの支持を得たところで、帝国には
意味がなからう？」

「おまえたちにはそうかもしれないが、この大陸には
神の威光を崇める者の方がよほど多い。解放軍がゼテ
ギネアの東大陸を解放したいまになつて正義の女神
フェルアーナが帝国を支持するとなれば、綻び始めた
帝国の支配に、たがを締め直すことができるかもしれ
ぬからな」

「だが、そうはできなかつたということだな？」

「あくまでも仮定の話だ、確たることはわからぬ。

ほかの理由も考えられよう。ラシュディ殿に限つて、
女神に会うなどという単純な動機とは思えぬ」

「ならば、私たちもルツェルンに向かうとしよう。

これ以上、ここで情報は得られそうにないしな」

「ルツェルンつてどつちの方向だ？」

「ここからだ」と北北西だ」

「やれやれ」

カノープスに続いてピタネも飛び立つた。

上空からはルガノ湖はまるで鏡のように凜いでおり、
ここが天空の島だということを忘れさせる。だがよく
考えてみれば、その水が無くなつてしまわぬことも、
島の端から流れ落ちた水が地上にどのような形で降り
注いでいるのかということも、わからないことばかり
なのだ。

湖を離れてしばらくしてから、カノープスはその建
物があとかたもなく消え失せているのを見た。彼はグ
ランディーナとサラディンにそのことを伝えたが、二
人には島がかるうじて見分けられる程度だ。

「無理に引き出された物が元に戻つたのだろう。塔
の低さが不自然だったこともこれで納得できる。沈む
ところが見られなかつたのは残念だが、何があつたの
か、見られただけでも良しとしよう」

彼女たちはそのまま解放軍本隊と合流するために、
北北西へ急いだのだつた。

「チェスター！ 武器持ったジャイアントが近づい
てきてるぜ！」

「野生のジャイアントではないのか？ 帝国軍だという確認は取れたのか？」

「まだだが、ぼさつと待つてるわけにもいかないだろう？」

「それもそうだな。用心するに越したことはない。

全軍停止！ 魔法部隊、前へ！」

皆が立ち止まり、命じられた者がさらに前進する。

ラウニーやポリーシャ、プレージラ槍騎士も前に出てきた。

「ヴァインタートウル山地はまだ抜けきつていなかったが、ずっと下り坂だったので、誰もがもうじき終わるものと思っていた。

ゼテギニアにも野生のジャイアントはいる。人間との交流はほとんどないが、言葉が通じるもので、稀に人間よりも魔獣に近い怪力を買われて、傭兵のような存在として軍に加わることもあるが、まとまったジャイアント部隊というのは旧王国時代以前から知られていない。しかし、粗末ながら武器や鎧を操れるという点は時々、重宝されるのだった。

また、ジャイアントが国を興したという話や、大勢で行動していたという話も聞かれたことはなく、大方の人びとにとってジャイアントとは、有翼人より野蛮

で言葉が通じる分、魔獣よりましな生き物でしかなかった。

だから、チェスターが疑ったのも無理はなかったが、もう一度偵察に立ったカリナは、粗末な鎧にゼテギニア帝国の紋章を見つけたと報告した。さらに、巨体に隠れて帝国兵や、魔術師を乗せたワイバーンまで接近しており、もはや帝国軍の襲撃は疑いようもなかった。

「先制攻撃をジャイアントに集中させよう。帝国軍もその力は頼みにしているはず、ジャイアントを崩せば、こちらにより有利になろう」

グランディーナが戻っていないので、リーダーたちは緊急会議だ。方針を手早く決めて、陣営を整えなければならぬ。グレッジ、シェイクの意見にポリーシャが同意し、チェスターもさして反対するところはないようだ。

だが、ランスロットは敵の陣容に引っかけかりを覚えただけで、黒騎士が撤退した以上、こちらの戦力は多少なりとも知られているはずだ。サラディンとラウニーの魔法はそれだけ強力なものだったのだ。その二人を警戒していないとは思えないのだが、ジャイアントについてそれほど詳しいわけでもないのだから、確実なことが言えなかった。

「よろしいか、ランスロット？」
チェスターが確認する。

もう時間がないことは彼にもわかっていた。そこで己の懸念を口にするにとどめ、それが当たらなければ良いのだが、と締めくくった。

「ランスロット殿、魔法よりも射程の長い攻撃方法は滅多にありませんぞ。弓は遙かに長いが、集団を攻撃するには敵の数が足りませんし」

「わたしも懸念で済めばいいと思う。だが、我々と戦ったのに帝国軍が無防備すぎるように思えるのが気になる」

「皆には警戒させておきましょう。万が一ということもありませんからな」

グレッグは元帝国兵でデボネア將軍の部下だったが、ゼノビアでステイングらとともに解放軍に加わった。貴重な魔術師ということもあり、加入後から活躍の場は多く、アラムートの城塞攻略前に、ウォーレンの補佐を命じられて魔法部隊の副官を務めている。人づき合いの悪いウォーレンと違い、若い魔法使いや人形使いたちをよく鍛えており、一部でのあだ名は鬼教官というそうだが、彼に勝てるほど魔力を鍛えられた者もなかなかいないらしい。

ランスロットはいつでも飛び出せるよう、魔法部隊とともに隠れた。

グレッグが皆に注意を促す。

「みんな、隠れろ！」

カリナの声に、何事かと逆に頭を出しかけたカシムをランスロットは引つ張った。

そこへ猛烈な突風が吹いてきて、狭い山間の道を滅茶苦茶に吹き荒れた。カシムがあのまま頭を出していたら、飛んできた岩に頭を潰されていたかもしれない。

隠れていても吹き飛ばされる者、運悪く風の通り道にいた者もあり、特に魔法部隊は軽装だから、皆はあつという間に混乱状態に陥った。

吹き飛ばされないで済んでも、ほとんどの者が風にあおられた石や岩で怪我を免れなかつたのである。

思い切つて様子をうかがつたランスロットは、件のジャイアントたちが第二陣の突風を巻き起こすところを見た。人間の子どものほどの大きさの棍棒を彼らが振り回すと、竜巻が発生したのだ。

「頭を引つ込めてください！」

するとグレッグに勢いよく引つ張られた。

「あれはただのジャイアントではないぞ」

彼は神妙な顔で頷いた。

「ジャイアントには時々、地形に合わせた突然変異が生まれると聞いたことがあります。帝国軍がこのシャングリラで仲間を引き入れたのかもしれないね。ですが、我々には手の出しようがない。この風では弓も届きませんし、魔法も射程外だ」

「だからといってこのまま手をこまねいて見ているわけにはいかないだろう」

「帝国軍とて、いつまでもジャイアントの影に隠れたままではいられません。迂闊うかつに動けば、奴らの思うつぼです」

チェスターやポリーシャもグレッグに同意見だった。三人は浮き足立ちそうになる者を懸命に制し、ランスロットも協力する。

治療部隊も軽装だし、女性ばかりなので動くわけにもいかない。皆は怪我人をかばい合い、いたわり合いつつ、辛抱した。

しかし風はまったく同じところなど吹かない。さつきは安全だったところが次は危険極まりなくなる。

それでも解放軍が飛び出していかなかったのは、風が強すぎて帝国軍に接近するのも容易ならざる事態だったというのも大きかろう。

そしてグレッグの鬼教官ぶりはここでも遺憾なく発

揮されて、ランスロットは大いに感心させられたのだった。

とうとう先に痺れを切らしたのは帝国軍であった。

ジャイアントを先頭に突撃してきたところへ、解放軍から反撃ののろしが上がった。

敵からも強力な魔法が撃ち込まれると、ラウニーと槍騎士の援護が加わり、解放軍がまた押し返す。

接触してしまえば、後は敵味方入り乱れての乱戦だ。

しかし、相手が人間とジャイアントだったためか、ブリュンヒルドは鋭い切れ味こそ見せたものの、今回はランスロットを振り回すには至らなかった。

「私はハイランド王国の聖騎士ラウニー＝ウィンザルフ！ いまの帝国に正義はないわ！ 何が人びとのためになるか、一緒に考えないこと？」

剣士の手は一瞬止まった。ラウニーの名は知らなくとも、ウィンザルフ家の名は大將軍とともに名高い。そんな人物が解放軍とともに戦っていることは、帝国の兵士たちにとって多少ならずとも動揺をもたらさずにはられないはずだ。

「ラウニー殿、危ない！」

だが、彼は次の瞬間には躊躇うことなく彼女に斬りかかり、ランスロットが庇った。

「何をするの?!」

「あんたが本物のお姫様だろうと俺たちには関係ないね! こんなところで軍を脱走してみろ、故郷で待つてる家族がどんな目に遭わされるか、あんたはガレス皇子の恐ろしさを知らないんだ!」

「ガレス皇子? 彼が恐ろしいのは、エンドラさまのために何でも斬るなんて言うからよ!」

「とんでもない! そんなお方が気紛れに部下を殺すものか! このシャングリラに来てからだって、反乱軍のリーダーがいまだに捕まえられねえって、毎日、何人も殺されてるんだぞ!」

「何だって?!」

傍で二人の会話を聞き流していたランスロットだが、急にそんなわけにはいけなくなつた。彼はラウニーを差し置いて、その剣士を追い詰めると、捕虜として後方に引つ張つていった。

彼女は驚いたようだが、また戦闘に戻つていった。

「な、何しやがるんだ?!」

「無闇に命を取ることはいらないが、後で訊きたいことがある。

モーム、悪いが彼を見張つていてくれ」

「気をつけてくださいいね、ランスロットさま」

そこへ、ようやくグランディーナたちが戻つてきた。サラディンとカノープスは即座に前線に加わり、頼もしい味方の復帰に解放軍は俄然、勢いをつけて帝国軍を押し返し始める。

とはいうものの、グランディーナは、前線に置くと宣言したブリュンヒルドごとランスロットが後方に下がつていたので、あまりいい顔はしなかつた。

「その男にそれだけの価値があつたのか?」

「聞き捨てならないことを口走つたから、尋問の必要があると思つたのでね」

「何と言つた?」

「ガレス皇子の機嫌が、君を捕まえられないからといつて部下を殺すほど悪いそうだ」

「私は帝国にとつて最大の障害物だ。ガレスの機嫌など、いちいち気にすることもあるまい」

「君がゼテギネア帝国最高の賞金首であることは、わたしだつて知つている。だけどその文面は『生死を問わず』だ。わたしたちも何人か賞金首になつているが、誰一人として生きたまま捕らえろとは言われていないんだ。なぜいまになつて、ガレス皇子が君を捕まえろなどと言ひ出す?」

「奴の気紛れなど私が知るものか」

グランディーナはランスロットを振り切るように皆の方へ行ってしまったので、敵方の剣士と二人だけで残された。戦闘が終わったので、治療部隊が働き始め、ユーリアもその手伝いに行っているようだ。

「あれかい、反乱軍のリーダーって？」

「そうだ」

「あんまり女つぼくないけど、意外とふつうじゃないか。俺はもつと化け物じみた奴を想像してたぜ」

ランスロットは思わず剣士を睨みつけた。カノープスならば問答無用で拳骨の雨を降らしていたかもしれないが、少なくともそれで彼が気分を害したことは察したようだ。

「俺に訊きたいことってのは何だい？」

「ガレス皇子のことだ。君も意外と口が軽そうだが、故郷で家族が待っているんじゃないのか？」

「ああ、いるさ。だけど、このまま帝国軍に残るのも気が進まねえんだ。なにしろ、ガレス皇子の下にいる限り、いつ殺されても不思議じゃねえからな」

「ガレス皇子の出した命令について話してくれたら、君を放免できると思うが、どうだ？」

今度はランスロットの方が睨みつけられた。

「そんな口約束、俺が信じると思うのか？ だいた

い、あんた、何様なんだよ？」

「これは失礼した。わたしはランスロットⅡハミルトン、解放軍の兵士だ」

「えっ？ あんたがランスロットⅡハミルトンだっ
て？」

「はははっ、わたしも有名になったのだな。悪い噂でなければいいのだが」

「反乱軍の幹部っていうから、どんな奴かと思つて
いたが、意外とあんたもふつうの奴なんだな」

「君も遠慮無くものを言うのだな。それに帝国では、
解放軍がよほどの奇人揃いだとても教えられているの
か？」

「あはははっ、そんなわけじゃねえけど、不気味な
存在であるのは違くないさ。二〇年以上も誰も帝国に
逆らおうとしなかったのに、いきなり東の田舎から打
倒帝国を掲げてきたんだからな」

不意に彼の頭がのけぞり、うめき声を発した。引つ
張つたのはグランディーナだったが、その後ろにはサ
ラディンもいる。

「あなたは先に行け。尋問は私が替わる。少し聞い
ておきたいこともあるからな」

サラディンが頷いたので、ランスロットにはそれ以

上、そこに残る理由がなくなつてしまつた。

気がつくとは皆はずつかり支度を済ませて発つており、彼は待つていたカノープスに追いついた。

「何だ、聞き捨てならない話つてのは？」

二人でエレボスに騎乗すると、これ以上ない内緒話の場だ。

「ガレス皇子がグランディーナを捕らえられないからつて、毎日、部下を殺しているという話だ」

「アヴァロン島でお目にかかつた時もふつうじゃないと思つたが、何か化け物じみてきたな。それで？」

「それ以上、聞き出す前に彼と余計な話をしまつてね」

「おまえつて、つくづく尋問とか向かないよな。そんなものを、簡単に聞き出せそうなものじゃないか」

「つい、彼との話に興じてしまつたんだ。彼が我々のことを意外とふつうだの何のつて言うものだから、親しみを覚えてしまつて」

「解放軍に加わるつていうんならともかく、曲がりなりにも敵兵だろうが。あんな若造に丸め込まれてどうするんだよ」

「すまない、君の言うとおりだ」

「まあ、謝る相手は俺じゃないし、そもそもおまえ

に尋問は無理だ。よく自覚して、次からは捕まえるだけにしておくんだな」

「そうするよ」

「それよりも聞いてくれ」

「どうしたんだ？」

「さっきの戦闘でユーリアのやつがワイバーンの命乞いをしやがつたんだ」

「彼女らしいじゃないか」

「魔獣をやたらに殺すなつて話には俺だつて賛成さ。だけどな、あいつときたら、早く傷が治るようにつて秘蔵の身体の源を飲ませやがつて、どうせ後で逃がしちまうくせに」

「何だい、その身体の源というのは？」

「俺たちが翼人に伝わる魔獣の滋養強壯剤だよ。一月に一週くらい飲ませてやると、魔獣が元気になるし、毛艶も良くなるし、いいことづくめなんだ」

「なるほど」

「ただど材料を集めるのが大変で、俺は忙しい合間を縫つてだなあ、一生懸命集めてるんだ。その身体の源をあつさりあんなワイバーンにくれやがつて」

「彼女は優しいからな。そのワイバーンを見過ごせなかつたんだろう」

「くつそー、それなのに『そろそろ切れかけているから、よろしくね』ときたもんだ」

「まあまあ、落ち着いてくれ、カノープス。ルツェルンらしい町が見えてきたじゃないか」

「どれ？」

遙か前方に町らしい家並みが見えてきた。エルシリアと同様、外壁はない。それに畑と畑の間に家がある。町と言うよりも村だ。周囲の平原との境界も曖昧で、攻めやすく守りにくそうだった。

「シャロームの田舎を思い出すような光景だな。あれがルツェルンでいいんだろうな。ん？」

「どうした？」

「カリナが呼んでるんだ。ランスロット、エレボスの手綱を持っててくれ」

「どうするんだ？」

「あいつが何か気づいたんだろうから行ってくる。しかし、ディアスポラの時といい、カリナが見つかるのつてろくなものじゃねえんだよなあ。あと、この旗、振ってくれよ。それで下の連中が止まるはずだ」

「承知した」

カノープスはエレボスに二言三言話しかけると、勢いよく飛んでいった。グリフォンやワイバーンにはさ

すがに劣るが、こうして見ると彼もなかなか速い。

しかしランスロットは忘れないうちに旗を振った。解放軍の青い無地の旗だ。ずっと下の方で誰かが旗を振り返したが、視力の良さでユーリアに間違いないだろう。

「ランスロット！ グランディーナたちはまだ来ねえか?」

そこへ血相を変えたカノープスが文字どおりすつ飛んできた。戻るのが早いと言う間もない。

「いや、まだだと思うが、何かあったのか？」

「あの村に動いている人間がいねえんだ。」

エレボス、おまえ、急いで迎えに行つてこい！

ランスロット、後は任せたぞ！

「承知した！」

たちまちカノープスが遠ざかり、冷たい風に頬を切られそうになる。エレボスの翼は解放軍で一番速い。ランスロットが指示する必要もなく、じきにグランディーナたちが見えてきたが、彼ときたら、振り落とされないようにしがみついているのが精一杯だった。

一方、ランスロットを追い払って、グランディーナは帝国軍の剣士を尋問していた。

「あなたの名前は？」

「ガランスⅡデュルケームだ。俺なんか捕虜にしたらって大した金はないぞ！」

「解放軍は捕虜も取らないし、降伏した者を殺しもしないと、いつになったら帝国軍は言い聞かせるようになるのだろうか？」

「おそらく、この先もすることはないだろう。帝国軍に良いことはない」

「ガランス、あなたに聞きたいことは一つだけだ」

「お、俺がしゃべるとでも思ってるのか？」

グランディーナは膝を落とし、彼と同じ高さの視線になった。突風が赤銅色の髪をおおる。

「ガレスが私の捕獲と解放軍全滅の指令を出したのは本当だな？」

彼女の言葉にガランスの頬が動いた。彼は肯定も否定もしなかったが、その表情が何よりも雄弁だ。

グランディーナはサラディンを振り返り、彼も頷く。それから彼女は立ち上がると、腰の剣を抜き、ガランスを縛った綱を切つ先で絶った。彼は自由の身になり、信じられない様子で二人を交互に見た。

「あなたのためにカオスゲートを開いてやるわけにはいかないが、どこでも好きなところに行くがいい」

「あんた、本気で言ってるのか？ 俺が帝国軍に戻つたらどうするんだ？」

「愚問だ。手向かえば切るし、降参すれば許す」

「俺が丸腰だからつてなめてるのか？」

「ガレスの指示は私を捕らえることだろう。あなたには無理だ」

「こいつっ！」

サラディンが動くまでもなかった。ガランスが捕まえて来たのをグランディーナは身体を沈めてかわし、そのまま顔面に蹴りをたたき込んだからだ。

だから、ランスロットがエレボスとともに到着した時、そこには伸びた帝国軍兵士が倒れていた。背中が上下するので生きているのはわかるが、どう尋問したら、相手が鼻血を出して気絶していることになるのか、ランスロットには理解しがたい。

「グランディーナ、カノープスの報告ではルツェルンらしい町に人がまつたくいないそうだ。皆には停止するよう伝えてある。すぐに行つてくれ」

「わかった」

彼がエレボスを降りると、グランディーナはすぐに騎乗し、サラディンも後ろに乗った。彼の顔が青いが、引き止める間もなく、グリフォンは速攻で戻つていく。

ランスロットも急いで走り、皆に合流した。

カノープスが事情を説明したのでろう。ただならぬ事態を察してか、青ざめた顔色の者も少なくなかった。

「ランスロット、俺たちもルツェルンに行くぞ。治療部隊以外は全員でルツェルンを囲めつて指示だ」

「何をしようつていうんだ？」

「これからサラディンが大がかりな魔法の準備をする。そのあいだに帝国軍に邪魔されないよう、俺たちに守れつて話だ」

「グランディーナは？」

「魔法をかけるのにあいつも必要なんだと」

「彼女には魔法の心得はないんじゃないか？」

「俺もそう聞いたと思っただがな」

話しているうちに一同はルツェルンの町に着いた。

動く者といえば風ばかりの町を浅い溝が囲み、サラディンが何やら地面を杖で掘り返している。

町の傍らにはユーリアがピテュスとともに待機していて、皆に溝を踏み越えないよう注意した。

「皆さんがその線を越えてしまうと、サラディンさまのかけようとしている魔法が働かなくなってしまうんだそうです。グランディーナは襲撃は夜になるかもしれないと言っていましたから、いまのうちにかがり火

を用意しておいた方がいいかもしれませぬ」

「戦闘が始まったら、どきどきに紛れて踏んじまうかもしれないねえ。それでも駄目なのか？」

「絶対です」

ユーリアは問答無用と言わんばかりの笑顔を浮かべ、皆が手分けして火の支度をするのを見守った。

「面倒くせえなあ。何だつて、そんなことを言い出すんだ？」

カノープスもぼやきながら働いたが、彼の性格を考えれば、決して踏まないのは明らかだ。

だが、サラディンの言いつけはランスロットにも不可解である。以前、マラーノ攻略の時にウオーレンたちが描いた魔法陣の実験に彼も立ち会ったことがあるが、魔法陣を壊さないよう注意は受けたものの、絶対に外の線を越えるなという話は聞かなかつたからだ。

もつとも、あの時の魔法陣は直径一バスの大きさしかなかつたので、外周の線を踏めば魔法陣そのものを壊さないではいられなかつただろう。

しかし、今度のはそれよりもずっと大がかりで、かつてポグロムの森で、グランディーナの身体を借りた賢者ポルトラーノが描いたという魔法陣よりも遙かに大きい。直径三〇バスのそれを、ポルトラーノは約二時間

ほどで描いたそうだが、サラディンはルツェルン全体を囲む魔法陣を描くのに、どれほどの時間をかけるつもりなのだろうか。

「グレッグは手伝っていないのだな」

「ああ、サラディンが一人でいいって言ったんでな。だけど汗水垂らしているところを見ると、見かけよりずっと大変そうな作業だな。それにしても、あいつも人使い荒いよなあ。サラディンが汗を垂らすのは、今日、二度目なんだぜ」

「それほど切迫しているのだろうか」

「さあ。それなのに一人でやる理由がわからん。ユーリアがいるのは、何でも終わり次第、サラディンを連れ出すためだって話だ」

「大将、それよりも家の中、見てくださいよ」

「何だ？ おまえが見つけると、ろくなことがねえからなあ。いまだって俺の予感当たったんだぞ」

「そんなこと言わないで、ほら、あそこ」

カノープスばかりか、ランスロットもカリナの指す方に目をこらした。

家の中で人が倒れている。思わず助けに行こうとして、ランスロットは両脇から思い切り引き止められた。「何をするんだ?! 生存者がいるかもしれないじゃ

ないか」

しかし、カノープスもカリナも揃って首を振った。

「死んでるんだよ、あれは死体が転がっているだけだ。俺たちが急いだって、できるのは吊つてやることだけなんだ」

「何のために、こんなことを？」

そうつぶやいたきり、ランスロットは絶句する。同時に怒りがこみ上げてきた。おそらくは解放軍を止める、倒す、ただそれだけのために何の関係もないルツェルンの人びとは殺されたのだ。地上の争いを憂えて天空の島に逃れた人びとの子孫が、最も残酷な形で地上の争いの犠牲となったに違いない。

「グランディーナがあれに気づかないはずがねえし、サラディンもそうだ。だけど、死体の埋葬よりも優先したいことがあるんだろう」

カノープスの声は周りに気遣つてささやくようだ。

実際、ポグロムの森の焼き討ちで両親を殺されたカシムなど、これを見たら決して黙つてはいまい。ランスロットも自重せねばならなかった。

やがて皆の支度が済むと、動き回っているのはサラディンだけとなった。グランディーナは相変わらず町の真ん中から動いていない。

彼の影がだんだん長くなる。辛そうに見えるが誰も手伝えないし、手助けできない。サラデインの立ち止まる間隔は少しづつ短くなっていったが、彼を見守るグランディーナの眼差しは恐ろしいまでに冷徹だ。

ランスロットはふと、彼女が剣も鎧も身につけていないことに気づいた。手には細長い紙片を持っているだけだが、それもサラデインがかけようとしている魔法に彼女が要る理由なのかもしれない。

気がつくのと辺りに夕闇が迫ってきた。天空の島は上空にあるので陽が沈むのは早い。

問題なのは、サラデイン以外に動く者のないはずの町の中で、いくつもの影が夕闇に紛れて動き始めたということだ。

それらは最初のうちはただの幻に過ぎなかった。

ところが、ポグロムの森でお目にかかった亡霊のようにならぬ輪郭がはつきりしてくると、とうとうグランディーナが大声を張り上げた。

「サラデイン、急げ！ 時間がない！」

しかし、それでも彼女は動かない。群がってくる亡霊はうるさそうに追い払うものの、サラデインに近づくでなし、彼の作業が終わるのを待っている。

「二人とも、すぐにはやらねえだろう。それより

も俺たちの相手はこつちだぞ！」

夕闇に隠れて羽ばたきが近づいてきた。黒い翼のレイブンたちだ。そして亡霊たちも町の外に出てき始め、皆を襲いだしたのだ。

ブリュンヒルドはレイブンにも亡霊にも抜群の効果を發揮したが、逆に敬遠されて、ランスロットには誰も近づかなくなってしまった。

そしてレイブンたちが次々に魔法陣の内側に向かうのを止めようとするのも、カノープスとカリナ、グリフォン二頭で凌ぎきれぬものでもなかった。

「グランディーナ！」

サラデインの声が飛んだのはその時だ。

「アイギークの名において我、浄化の力をここに召喚す！ 受けよ、審判！」

最初、光はグランディーナの持っていた紙片から発せられた。それが魔法陣に当たると、唸るような音を立てて魔法陣全体が光を発し、内側にいた、あるいはその光に触れただけの亡霊を消滅させていった。

もちろん侵入を試みたレイブンたちも無事ではいられず、酷い火傷状の傷を負ってはじき出された。

サラデインはぎりぎりのところでピテュスに拾われていたが、グランディーナはど真ん中だ。

しかし彼女は光が消えるまで立ち続けた。

ルツェルン全体を覆った光の柱は天まで届き、敵とはいえレイブンの惨状を見ると、誰もがその内側に足を踏み入れることはおろか、光そのものに触れることさえ躊躇うというのに、彼女が無傷でいられるのは不可思議と言うよりなかった。

すべての光が失せた時、サラデインの苦心の跡は見る影もなく、グランディーナの手から紙片も消えていた。そして彼女が召喚したという浄化の力は、ルツェルンの町そのものにはいかなる傷痕ももたらしていなかった。

「怪我人の報告と野営地の設置を、急げ！」

彼女が命じて、ようやく皆の時間が動き出す。

治療部隊が合流し、ルツェルンを囲んでいたかがり火が動かされた。辺りはすでに真つ暗で、さすがに今晩は携帯食で済まざるを得ないようだ。

「皆さん、今回は軽傷ですね」

「だが、さすがに怪我人が増えたな。明日は少しゆつくり進むか」

「ほんとですか？」

モームの声が珍しく弾む。グランディーナがらしからぬことを言ったからだろう。

「帝国も無制限に兵を送り込んだわけでもないらしい。そろそろ兵も尽きそうだから、様子を見てもいいだろう」

「わかりました」

グランディーナは頷くと、松明を片手にルツェルンの町に入っていった。サラデインが町の入り口で合流し、ランスロットとカノープスも追いかける。

「グランディーナ！ 何をやらかしたんだか、説明してもらおうか。おまえ、魔法はまったく使えないはずじゃなかったのか？」

「その話なら皆も聞きたかろうから後で話す。」

サラデイン、見つかったか？」

「こちらのようだ」

二人はとある家屋に入っていった。遺体の様子も、あの術を使う前と変わりが無い。生身のグランディーナが無事なのだから、それも当然かもしれないが、ランスロットにもカノープスにも釈然としない。

「見つけたぞ」

サラデインの言葉に彼女が頷く。彼が袂に落としたのは、黒っぽい石を嵌め込んだ指輪だ。

「おいおい、よりによって解放軍のリーダーが火事場泥棒を率先するのによ？」

「残念だが、これは初めからわたしに見つけられるためにここに置かれていた物だ。だが、まだ何かあるようだな」

カノープスが何か言おうとするのをグランディーナが制する。その表情は驚くほど真剣で、この二人だけが今回のルツェルンでの戦いに、何か特別な意味を見出しているようにもランスロットには思われる。

サラディンは表に出、しばし頭こゝろを巡らした。
「どうした、サラディン？ 一つだけではなかったのか？」

「いや、こちらだ」

乗りかかった船でランスロットもカノープスも立ち去るわけにいかず、二人の後についていく。

サラディンは南瓜畑に入っていた。まだ収穫の時期には早いらしく、南瓜は青く小振りだ。しかし誰が収穫するというのだろう。

杖で畑をほじくり返していたサラディンが、小さな石を投げてよこした。彼は次に茄子畑、最後に玉蜀黍畑に行き、似たような石を一つずつ拾った。表面には四神、炎神ゾシヨネル、水神グルーザ、風神ハーネラの象徴が刻まれているだけだ。

「捜し物は終わったのか？」

サラディンは頷いた。

「じゃあ、説明してもらおうじゃねえか、こんなことをする理由を。それにあんた、さつき『残念だ』なんて言ったな。どういう意味だ？」

「この指輪も石も、わたしが偶然、見つけた物ではない。わたしが探せば見つかるように仕組まれていた。それが誰によるのかは言うまでもあるまい？」

カノープスの表情が変わり、ランスロットも息を呑む。しかしサラディンは淡々と話し続けた。

「思えば、ルガノ湖で察するべきだったのだ。なぜ、誰にも開けられない塔があんな風に地中から引つ張り出され、傷つけられたのか、意図に気づいていれば良かったのだ」

「あれがラシュエディのこれ見よがしな行為だとわかっていても、ルツェルンでの住民殺害は止めようがなかった。私たちは奴に遅れているのだ。あなただけのせいじゃない、サラディン」

「どういう意味だ、そりゃあ？」

「ルツェルンの人びとが殺され、何人もが悪霊として蘇ったのは仕組まれたものだということだ。ポグロムの森もそうだが、人はこんなに簡単に悪霊にはならない。時間だけではなく多くの要因がある。時間、人

的なものがそれだ。だがこの人たちは最初から悪霊にするために殺されたのだ」

「悪霊にして俺たちに襲いかからせるためか？」

「違う。ラシュデイ殿はわたしたちの力を試したのだ。悪霊には通常の武器が効かないことは知っていたよ？ いまの解放軍で有効なのは聖剣ブリュンヒルドのみ、それだけでこの事態にどう対処するのか、ということが問われたのだ」

「私の持つていた紙片をラシュデイが知っていたとは思えないが、サラデインの描いた魔法陣はそれを増幅しただけだ」

「待つてくれ。悪霊に対してなら司祭たちが有効な手を打てたのじゃないか？」

「そうだ。だがサラデインが間に合うかどうかかわからなかったし、彼女たちの命を危険にさらすわけにもいかない。悪霊がどれだけ出てくるか、夜にならなければわからないのだからな。私ならば多少の攻撃にも持ち堪えられる。どうせ、あの紙片は人に貰った物だ。ここで使ってもいいだろう」

「そんなことのために無関係の人間が殺されたっていうのか？」

「そうだ」

「畜生！」

カノープスは思わず地面に殴りかかった。

「このことは皆に言うな。」

それに、まだ続きがあるのだろうか？」

「この指輪と石があるからな。これは雷鳴の指輪で、石の中に雷の精を封じてある」

「雷の精？」

言われて手に取り、耳に近づけると、石の中から確かに雷鳴が鳴り響いた。それはいつまでも止むことなく、こんな石ころに封じられた雷の精の怒りの声にも聞こえた。

「俺にも聞かせてくれ」

気を取り直したカノープスも耳を澄ます。それは不思議な響きであった。

「この指輪、どうしようっていうんだ？ あるいははどうしろって？」

「我々は近いうちにガレス皇子と戦うことになる。おそらく、ガレス皇子は雷を苦手とするのだろう。これを有効に使わせてもらおう」

「おいおい、ラシュデイとガレス皇子は味方同士だぜ？ いくらラシュデイがあんたの師匠だからって、そう上手くいくのかよ？」

「だが、アヴァロン島でガレス皇子と戦った時に、ウオーレンが雷の魔法を使っていた。全身、鎧装束だから、有効なのじゃないか？」

「別にこの指輪があるからといって、我々がガレス皇子相手に特別有利というわけではない。彼のイービルデッドは強力だし、こちらがブリュンヒルドを所持していることも知っていよう。こんな指輪で戦局が覆るほど、たやすい戦いではない」

「そろそろ戻ろう。皆も休む前にルツェルンがどうなったのか知っておきたいはずだ」

「どこまで話すつもりなんだ？」

「ルツェルンの人びとが帝国に殺されたと言うだけで十分だろう。それ以上は知らなくても戦うことはできるし、ラシュデイの話など持ち出して、いらぬ疑いをサラディンに向けられるのも厄介だ」

彼女の言葉どおり、野営地に戻ると皆が待ちかまえていた。

「明日の予定は？」

「シャングリラ城の手前まで進めるだろう。インターラーケンの先で島が細くなっているそうだ。待ち伏せがあるとしたら、そこだろうな」

「承知しました」

「休む前にルツェルンのことを話しておこう」

応対していたグレッグはもとより、ほとんどの者が立ち去ろうとした足を止める。だがグランディーナは、見張りに立つ者は逆に去らせた。

彼女の警戒はいつものことだが、連戦続きで疲れの抜けない者も多く、今夜ぐらい休みたいのが本音のようだ。

「ルツェルンの町は帝国軍の襲撃で壊滅した」

単刀直入な言葉に多くの者が肩を落としたが、グランディーナは言葉を続ける。

「手段はわからないし、帝国がなぜそんなことをしたのかも不明だ。いろいろと理由は考えられよう、他の島も含めた天空の島への牽制、解放軍への見せしめ、だが、私たちのすべきことは、このシャングリラから帝国軍を追い出し、平和な世界を取り戻すことだ。あれこれ迷うより、いまはゆつくり身体を休めろ」

「死者の埋葬はしないのか？」

「ディアスポラとは規模が違う。帝国の襲撃に備えれば、さらに人手も減ってしまうし、あなたたちも疲れている。ルツェルンのことは次のインターラーケンで頼む」

「先ほど、あなたの使った技についても話してもら

えないか？」

「あれはゼテギネアに戻る前に、アイギークという人からもらった魔力を込めた紙片だ。増幅させて使ったのはサラデインの案だ」

「サラデイン殿が描かれたのは魔法陣とお見受けしたが、これほどの大きさのものをあれだけの短時間で描けるものなのですか？」

「先ほどは時間がなかったのでわたしの力を込めた。だから簡単なもので済んだのだ」

「そのやり方について、お伺いしても？」

「いますぐというわけにはいかないが、いずれ、そなたの時間がある時にでも話そう」

「ぜひお願いします」

グレッグはまるで少年のように頬を紅潮させて、サラデインに頭を下げた。

その夜、ランスロットがブリュンヒルドの手入れをしていると、アイーシャが天幕を訪れ、グランデイナーとサラデインが呼んでいると伝えた。

「ありがとう」

「何だ、こんな時間に？」

天幕の外には三頭のグリフォンとカノーブスが休ん

でいる。

「グランデイナーと呼ばれたんだ。ガレス皇子を倒す策をサラデイン殿が思いついたらしい」

「だからって、こんな時間に話さなくなつて良さそうなものだ。明日はシャングリラ城には行かないはずだろうに。おまえもおまえだ、何で起きてたんだよ」

「ブリュンヒルドを使つたままにはしておけないからね。君は来られないか」

「ああ、俺までいなくなつたら、エレボスが大騒ぎだ。せいぜい頑張れよ」

「どうしてエレボスが騒ぐんですか？」

「今日の昼間に、ユーリアがワイバーンを拾つただろう？」

「はい」

「グリフォンの世話は本当はあいつの担当なんだが、ワイバーンがまだ弱つてるとつていうんで、手が離せないと言いやがる。それでこいつがへそ曲げちまつて、カリナにや任せられないつてわけさ」

「大変なんですネ」

「まったく、こんなでかいなり、してるくせに、いつまで幼獣のつもりでいるんだか。かと言って、ワイバーンの面倒を俺が診るわけにもいかないしな」

そう言いながらカノープスの目が笑っているのは、彼が心から魔獣たちを可愛がっているからだろう。

「おまえもさつさと寝たらいい。ワイバーンの臭いに我慢できるなら、ユーリアのところとかな」

「はい、ありがとうございます」

彼女の居場所は聞くまでもなかった。アイーシャは低い声で子守歌を唄っているユーリアをすぐに見つけられたからだ。

保護された時は極度の興奮状態にあったワイバーンが、いまはおとなしく休んでいる。確かにエレボスが不機嫌になるのも無理はない。

「ユーリアさん」

「どうしたの、アイーシャ？ とつくに休んだものだと思っていたのに」

「グランディーナとサラディンさまがまだ起きていて、ガレス皇子を攻める話を始めたものですから。ランスロットさまもいらっしやるのに、私がいては邪魔になります」

「しょうがない子ね。あなた、彼女と一緒に天幕では休もうにも休めないでしょう？ サラディンさまに交替してもらって、治療部隊の人たちと一緒にの方がいいんじゃないかしら？」

「大丈夫です。今晚みたいなことは初めてですし。それに、いつも側にいられませんから、夜ぐらい一緒にいないと、彼女が無茶してるんじゃないかって不安になります」

「そう？ サラディンさまって、冷静なようできて、意外と話に夢中になると周りが見えなくなる方だったのね。グランディーナは自分のことだけは棚上げにするし、ランスロットは立场上、断れないし、兄さんは動けない。放っておくのがいちばんね？」

「はい。そう思ったので、私は何も言わないことにしました」

「あらあら」

ユーリアにつられてアイーシャも笑い出す。声を上げて笑ったのはシャングリラに来て初めてだ。グランディーナの側にいると気が抜けないし、デネブは今回、留守番だった。

すると、ワイバーンが鼻を鳴らした。急にユーリアの子守歌が聞こえなくなつたので心細くなつたようだ。

「大丈夫よ、ミニユアス。私はここにいますわ。あなたを独りぼっちになんかしらない。一緒にいるから、お休みなさい」

ワイバーンの頭を抱きながら、ユーリアは歌うよう

にあやしつけ、傷つけられた翼をそつとなでる。

「名前をつけたつてことは、ミニユアスは解放軍に入るんですか？」

「いいえ、ゼテギネアに戻つてから、この子は逃がすわ。戦いは嫌がつているし、この子の居場所つて案外ないのよ。ギルバルドさまのワイバーンは夫婦同士だから、この子が入つても仲良くしてくれないの」

「夫婦ですか？」

「ワイバーンはね、グリフォンと違つて一夫一婦なの。伴侶を見つけたら生涯、換ええないし、先に一匹が死んでも新しい伴侶は迎えないのよ」

「へえ。初めて聞きました」

「グリフォンは群れを作つて、強力なリーダーが率いるわ。雌はリーダーに優先権があるけど、若い雄も頑張れば機会はあるの。エレボスも野生にいたら、きつとリーダーになれてたわね」

「魔獣といつても全然、違うんですね、ワイバーンとグリフォンつて」

「そうね。私、次に生まれてくるなら、ワイバーンになりたいわ」

彼女の瞳に映る人物をアイーシャは知っている。旧ゼノビア王国の魔獣軍団長ギルバルドⅡオブライエン

だ。彼は今回の遠征ではダルムード砂漠のカオスゲート近辺に待機して、アラムートの城塞との連絡係兼、諸々の雑務をこなしている。

「もう休みましょう。すっかり遅くなつてしまつたから。これでは私もサラディンさまのこと、悪く言えないわね」

「大丈夫です。私、アヴァロン島育ちだから、早起きと夜更かしは慣れてるんですよ」

「でも休みましょう。明日、赤い目をしているわけにはいかないもの」

「はい」

ユーリアが手元の角灯らんたんを吹き消すと、辺りは暗くなつた。満天の星がいまにも空からこぼれ落ちそうで、アイーシャは歓声を上げる。

「どうしたの？」

「見てください、すごい星空です。それなのに星座が見慣れたものばかりつて不思議じゃないですか？」

「そうね」

耳を澄ませば聞き覚えのある虫の音も聞こえる。天空の鳥も、ゼテギネアの一部と言つてもいいのかもしれないなかつた。

翌金竜の月二〇日、解放軍はインターラーケンに向けて発った。右手にヴィンタートゥール山地を眺めながらだった。道は平地と林を縫うように進み、かなり楽な行程になった。

グランディーナは、斥候を除けば先頭を歩くことが多い。今日はサラディン、ランスロットにチェスターやグレッグまで加わって大所帯で歩いている。昨晩の話の続きだろうし、リーダーたちの話に一般兵が加わったり、声の聞こえるところにいることはないの、彼女たちだけ、やたらに先行していた。

もちろん、その前には影とエレボスに乗ったカノープスが先行中だ。カリナがピタネに乗って最後尾からやってきて、ピテュスとミニュアスがユーリアと一緒にいる。

アイーシャはユーリアと一緒にだったが、特に何事もなく、昼ごろには解放軍はインターラーケンの町にさしかかっていた。

町の規模も造りもいままだと大差ない。ただ、やたらに人が多く、解放軍に向けられる眼差しには強い不信感が表れていた。

グランディーナの合図で全軍が停止し、カノープスやカリナも合流した。

「何か、やな感じだな」

「ルツェルンについて、帝国が嘘の情報でも流したんじゃないのか？」

「それでも行くつもりか？」

「もちろんだ。私たちは帝国と違う。無辜むこの住民を攻撃することはないし、最初にすべきことは話し合いだ。ルツェルンでの虐殺が私たちの仕事だと喧伝されているのなら、その誤解も解いておかないとな」

「口で言うほど簡単なこととも思えねえが、誰が行くんだ？」

「大勢で行つてもしょうがない。サラディンとランスロットとで行つてくる」

「お気をつけて」

しかしエルシリアと異なり、インターラーケンでは町に入るのからして一苦労だった。やはりルツェルンの虐殺は解放軍の作業と喧伝されており、その釈明さえなかなか受け入れられなかったからだ。

だがグランディーナは辛抱強く言葉を選んで話しかけ、とうとう町長を引つ張り出すことには成功した。

「いつたい何の用だというのだ？」

それでもまだ町の入り口には大勢の人が立っている。

柵もないこの町の人びとは、グランディーナたちが町に入るのを阻止するために文字どおり身体を張っていた。そして彼女に限って、人の楯をかき分けていくはずもなかった。

「ルツェルンのことをあなたたちに頼まないでいくわけにもいかないのでな」

「何を言う。あれはおぬしたちの仕業ではないか」

「そうではないと言っている。もしも私たちの仕業ならば、なぜインターラーケンは無事なのだ？」

「油断させておいて攻め込もうという腹であろう。おぬしたち地上の人間は卑怯な手ばかり使う」

「卑怯な手を使っていれば、インターラーケンなどいまごろ残っていない。柵も外壁もなければ、あなたたちは武器も持っていない。襲う気があれば私たちが攻め込むだけでこの町は落とせる」

「だからと言って、おぬしたちがルツェルンの人びとを殺したわけではない証拠にはならん！」

恐怖に引きつって、町長の声が裏返った。

「解放軍などと名乗っていても、おぬしたちも地上の人間だ。平気で人を殺すのだろう。しおらしい顔でルツェルンのことなど頼んで何を企んでいるのか知らないが、早くシャングリラからいなくなってくれ！」

「そうだな。武器を棄てたあなたたちには私たちは皆、同じように見えるのだろう。これ以上、話しても互いに得られるものもなさそうだ。ただルツェルンの町はそのままになっている。できたら早く行って、遺体を埋葬してやつてくれ。あなたたちにはそれだけ頼んでおきたかった。」

戻るぞ」

「良かったのか、あれで？」

サラディンが口を開いたのは、町から十分、離れてからだった。

「時間をかけすぎた。それにここはゼテギネアであつてゼテギネアではない。ルツェルンの虐殺を解放軍の仕業にされても、地上での戦いに差し支えることはあるまい」

「わたしが良かったのかと言ったのは、彼らに『地上の人間は平気で人を殺す』などと言わせておいて良かったのか、ということだ」

「私に関してそれを否定するつもりはない。ただ、あなたたちのためには取り消させるべきだったな、すまない」

「おまえが謝ることはない」

野営地に戻ると、グランディーナはランスロットの予想したとおり、解放軍がルツェルン虐殺の犯人に仕立てられた話を手短にした。皆はあらぬ疑いに憤懣やるかたなかつたが、彼女はガレス皇子を討つべく、進軍を命じたのだった。

「サラディン！ あなたたちだけ遅れているぞ」

「うむ、すまない」

グランディーナが注意したのも無理はなかった。彼を中心にグレッグを初めとした魔法使いたちが、ちよつとした魔法談義に花を咲かせたばかりか、進軍まで止まつてしまつたからだ。

「続きはまた今夜にでもいたそう。落ち着いて話したいからな」

「よろしく願ひします、サラディン殿」

グレッグが言い、ほかの者も頭を下げる。皆は適当に散つたが、グランディーナが来なければ、そのままサラディンと話をしていたそうな、単に彼が話すのを聞いているだけでも満足してそうな顔ばかりだった。

「どうしたんだ、いきなり？」

「うむ。インタラーケンではつまらぬ思いをさせられたから、わたしがグレッグを相手に昨日の話題を

振つたのだ。そうしたら、いつの間にか皆がああして集まつてきてな」

「あなたならば、グレッグ以上に皆を鍛えられるだろう。だが場所を選んでくれ」

サラディンが頷くと、彼女はまた先頭の方に戻つていった。

解放軍が止まつたのはそれから間もなくのことだ。

グランディーナが昨晩、皆に注意を促した島の細くなつているところにたどり着いたのである。ここを越えれば、残るはガレス皇子の待つシャングリラ城のみであつた。

風が左右から一段と強く吹き上げていた。島の幅はこだけ一バーム（約一キロメートル）もないだろう。島の切れたところから下に雲海が見えて、自分たちがいま、天空の島にいるのだという確かな事実を教えてもいる。

しかもカリナが石を放ると、それはそのまま、何物にも阻まれることなく島から落ちていき、同様に足を踏み外したら、命がないのが明白になつた。

「何考えてるんだ、この馬鹿！」

「だって、やつてみたくなるじゃないですかあ」

「場所を考えろ！」

カノープスはホークマンの若者に拳骨の雨を降らせたが、皆の青ざめた顔は取り返しがつかない。

「迷っていてもしょうがない。進むぞ」

グランディーナとサラディンが最初に渡った。彼女も軽装な方だが、より軽そうなサラディンと手を繋いでいった。その後からランスロットとグレッグが手を繋いで渡った。

しかし時折、吹き抜ける突風は、そうでなくても軽装の者には身体が浮くほどで、特に治療部隊の女性たちにその傾向が強い。鎧を着て重そうな者と軽装の者が手を繋ぐことにしたのは、至極当然な話だった。

ラウニーとノルンも仲良く手を繋いでいったが、ラウニーは自分が浮かないのは鎧のせいだと言いつた。だが敵が襲いかかってきたのも当然、そんな時だった。ガレス皇子の親衛隊を名乗った黒騎士たちだ。ただし、その数は十人足らずであった。

「貴様ら反乱軍をこれ以上、先に進ませるわけにはいかない！ゼテギネア帝国のため、我らが皇子のためにもここで倒れてもらうぞ！」

ランスロットは、早速ラウニーともども応戦した。

しかし、サラディンやノルンが前線に立たされた上、後続が思うように進めない。

カノープスとカリナは、グリフォンでチェスターとオーサリドリクスを前線に運び、そのまま戦闘に加わった。

黒騎士たちの武器はガレス皇子に倣ってか、両手持ちの斧だ。攻撃こそ遅いが、その一撃の重いこと、並みの武器では歯が立たない。またにも打ち合ったカリナの鎚鉾は、一撃で真つ二つに壊されてしまった。

その攻撃をグランディーナは片手剣一振り流すように凌いで、ランスロットが助けに駆けつけるまでサラディンを守って耐えた。

ラウニーもノルンを庇っているので一歩も引けない。名槍オズリックスピアが娘の命を守るのに大いに役立つたと知つたら、ヒカシュー大將軍もさぞ喜んでに違ひなかった。

チェスター、オーサもそれぞれに善戦し、カノープスやグリフォンたちの働きも言うに及ばずだ。

武器を失ったカリナだけは、グリフォンで騎士たちを輸送する役目に徹した。

とうとう黒騎士が最後の一人になった時、彼は島の端まで追い詰められていた。

「降参しろ！ 武器を捨ててんなら、命まで取る気はない」

グランディーナの勧告も素直に聞き入れそうにないが、彼にはもはや、武器を奮つて突つ込んでくるか、島から身を投げ出すか、二つに一つの選択肢しか残されていなかった。

その時、ひととき強い風が彼を巻き込むように吹き上げ、その身が大きくよろめいた。ひとたび平衡を崩してしまつと、鎧が重いだけに自力で戻せない。

彼の手から離れた斧がまず落ちていき、彼もそのまま島の外に投げ出された。

皆が目を背けた刹那、助けに飛んだのはカノープスであった。

「重てえ〜っ!!」

「大将!」

しかしカリナが手を貸さねば、二人は重さに負けたりう。

慌てて飛んできたエレボスがさらに彼らを助けなければ、そこから飛び上がることも一苦労だつたらう。

「兄さん、無茶しないで!」

泣きついたユーリアに、カノープスは息を切らすだけで応えられなかった。カリナも黒騎士もしばらく口

がきけなかったほどだ。

敵の生死はともかく、皆はカノープスが無事だったことに安堵して、後始末に立ち働いた。

取り乱していたユーリアも、アイーシャに慰められつつ、グリフオンの世話に戻った。

この場に残つたのはカノープスたち三人のほかには、グランディーナとサラディン、それに念のためにランスロットだけだ。

黒騎士はやがて兜を脱いだ。現れた顔はごくふつうの中年男性で、ギルバルドと同世代のようだ。髪も瞳も肌の色も薄く、典型的な旧ハイランド人だった。

「なぜ、わたしを助けたのだ?」

「身体が動いたんだ。理由なんかないさ」

「馬鹿な! わたしたちはおまえたちの命を狙つたのだぞ。このまま放されても、わたしはガレス皇子にお仕える騎士として、またおまえたちの命を狙う」

「まあ、その時は俺も手加減しないさ。だけど、あんな風で落とされるなんて不可抗力だろう? あんたが死にたがっていたなら話は別だけど、そういう風には見えなかったからな。それに俺には翼がある、一緒に墜ちる気はしなかったしな」

「大将、俺の貢献も忘れないでくださいよ」

「馬鹿野郎、おまえの貢献なんて、さっきの石投げでちやうだ」

「そんなあ」

騎士は呆れたような顔でカノープスを見た。

「信じられん。わたしたちは先ほどまで殺し合いをしていたんだぞ！ いったい何が狙いだ？」

「狙いなんてご大層なものねえよ。さっき、うちのリーダーが言っただろ、武器を捨てて降伏しろって？」

「降伏させて何とする？」

「どうするんだ？」

「放す。私にわざわざ確認することではあるまい」

「リーダーのおまえが言えれば説得力があるんじゃないかねえかと思つたんだよ。味方があれだけ倒されりゃ、疑心暗鬼になつてもおかしくねえだろう？」

「疑心暗鬼はお互い様だ。帝国兵を武装解除しただけで解放することに、解放軍内でも反対の声はある。いまのところ、大した効果も上がつていないしな」

「ならば何のためにそんなことをするのだ？」

「解放軍は捕虜を殺さない。そう喧伝できて、帝国軍内に戦闘を避けたがる空気が広がれば、その方が互いのためにいいだろう。殺し合うばかりが能では困る

からな」

「わからんな。この戦いを始めたのはおまえたちの方ではないか。戦いを仕掛けておいて、それを回避したがるとはどういうことだ？」

「私たちの目的はゼテギネア帝国を倒すことだ。帝国に与する者とは戦うが、その全てを殺せば新たな怨嗟をまき散らすことになる。それでは意味がない、第二のゼテギネア帝国を生むことになるだけだ」

「甘いな。このまま放されれば、わたしはまた帝国軍に戻る。おまえたちを殺すために戦うことも厭わぬし、それこそ騎士たる者の務めと考える。わたしを解放するのなら確実にそうなるぞ。それでもかまわないと言うのか？」

「愚問だ。私は何度でも戦うし、何度でも解放する。半端に辞めるぐらいなら、最初から解放しない。満足したら去るがいい。せつかく拾われた命だ、無駄に使わないことだな」

「ちよつと待つてくれ」

立ち去ろうとする黒騎士にカノープスが声をかけたので、彼はますます理解に苦しむと言いたそうな顔で振り返つた。

「せつかくだ、名前ぐらい教えてくれよ」

「そんなものを知ってどうするつもりだ？」

「今度、会った時に名前も知らないんじゃないや不便だろう。よう、何だつけ？ ってわけにはいかねえし。そうそう、俺はカノープスⅡウオルフっていうんだぜ」

「知っている」

「へえ、そいつは光栄だね」

「おまえたちはゼテギネア帝国の賞金首だぞ！ 知

らぬわけがなからう」

「で、あんたの名前は？」

「ヴラマンクⅡロストウだ」

彼は兜をかぶり直すと、シャングリラ城の方に去っていった。

「いいのか、行かせちまつて？」

「止めた方が彼のためだが、聞き入れまい」

彼女が進軍の合図を出したので、解放軍もまた進み始めた。その前を、ヴラマンクⅡロストウと名乗った黒騎士がいつまでも歩いていった。

しかし解放軍がシャングリラ城を前に歩みを止めた時も、彼の歩みは止まるところを知らず、何者にも邪魔されることもなく、やがてシャングリラ城に入ってしまったのだった。

「今日はここで夜営だ」

解放軍が止まったのはシャングリラ城が間近に見えるところだった。そのあいだには城の前庭しかない。

だがこれだけ接近したというのにシャングリラ城から人の出てくる気配はなく、不気味なくらいに静まりかえっている。

「どうなってるんだ、あの城は？」

「連れてきた兵士が全ていなくなつたのだろう。状況を聞いてくる」

そう言うどグランディーナは歩いていった。見送るうちにその姿が物陰に隠れてしまう。

「大丈夫か、あいつ一人にして？」

「ここまで近づいても帝国軍のいる様子がないからな。だが本当に誰もいないのだろうか？」

「影が偵察できるんだから、見張りはあるもかなり緩いんだろうな。このまま攻め込んで、ガレス皇子を討つてわけにはいかねえのかな？」

「皇子がどこにいるのかわからぬし、シャングリラ城の構造も知らぬ。数の上では有利かも知れぬが、あまり懸念な策とは言えぬな」

「だからって、ここで朝まで待つてるのも芸がないだろう？」

「ガレス皇子が我々の来るのを坐して待っていると思えない。下手にシャングリラ城に攻め込めば、それこそ皇子の思うつぼかも知れぬぞ？」

「別にあいつに無断でそんなことをしようとは思わねえよ」

「ならば良い」

サラディンはそう答えると、黄昏れてゆくシャングリラ城を見上げた。

ゼノビア城の実用的な造りと大きく異なり、美しい形の城だ。大小の尖塔が五つ聳え、白亜の壁と藍色の屋根が調和している。ここに正義の女神が住んでいると言われれば、なるほどと頷かずにいられないような優美さがあつた。

だが、いま、そこにいるのは、部下さえも躊躇うことなく殺すゼテギネア帝国の皇子なのである。しかも部下は一人も残っていないらしい。

やがてグランディーナが戻ってきた。彼女はいつものようにリーダーたちを集め、現在の状況を説明する。「予想どおり、あの城にはガレスしかない。奴はゼテギネアに使いを出したようだが誰も戻っていない。当然だな、カオスゲートの側にはギルバルドたちがいるのだから。つまり、このシャングリラには、私たち

とガレスだけだということだ」

「だが今晚はガレス皇子を攻めないのですな？」

「夜はやめよう。影の報告によると、城内は吐き気がするそうだ。ただガレスが城から出てこなければ、こちらから攻めるしかない。奴が城を離れないのも何か理由があるのかもしれない。今晚、無事に済めば、明日はこちらから出向く」

「承知した」

サラディンがランスロットに雷鳴の指輪などを渡す。今回の作戦での彼の任務はとても危険なものだ。だから急遽、皆から護符が募られたのだが、出てきたのはシキユオーンⅡグルーナーからの精霊の護符と、カリナからのヤドリギの葉だけだったのである。

「見張りはいつもと同じでいい。明日は夜明けに発つ。解散」

それで皆が散つたが、グレッグはサラディンに近づき、魔法部隊も集めて明日の打ち合わせに余念がない。そのまま昼の続きもしたそうだ

チェスターは見張りを選びに行き、ユーリアはグリフォンとワイバーンの世話だ。

残ったランスロットの肩をカノープスが力強く引き寄せた。

「思えば、おまえとも短いつき合いだつたな」

「縁起でもない言い方はやめてくれ。わたしはこんなところで倒れるつもりはないんだ」

「もちろん、おまえに倒れられたら俺だつて困る。」

だから景気づけにつき合え」

「ええ？」

カノープスが酒瓶を取り出して笑うと、どこから嗅ぎつけたのかカリナまでやってきた。魔獣部隊の面々は酒がからむと信じられないような嗅覚を発揮する。

しかしランスロットは、今日は素直に二人の厚意を受けることにした。

ガレス皇子の強さはアヴァロン島で経験済みだ。ブリュンヒルドの驚異的な威力があつても、どれだけ通用するかはわからない。強敵と戦うことに騎士としてやり甲斐は覚えるが、恐ろしくないと言えば嘘になる。だがせめて、いまはそれも酒に紛らわしてしまふのも悪くない。今宵一夜、戦いを忘れて眠るのも、必要なことではないだろうか。

そんなわけで、ランスロットは早々に酔いつぶれた。

彼が二日酔いで目覚めなければいいと思ひながら、カノープスはカリナと二人、杯を傾ける。

グランディーナの天幕だけ、まだ灯りがついていた。アイーシャは今日も、ユーリアの側で休んだらうか？

シャングリラ城に突入した時、嘘えようのない悪意が解放軍を包んだ。それは吐き気がすると言うも生易しく、城そのものが敵となつて彼女らに襲いかかってきたようさえあつた。

しかしランスロットがブリュンヒルドを抜くと、白刃の光が柔らかく一同を包み込んだ。まるでシャングリラにいるという正義の女神が見守ってくれるようにも感じられた。

「ここで二手に分かれる。そちらはサラデインの指示に従え。先導は影に任せる。行くぞ」

シャングリラ城の内部構造はそれほど複雑なものではなかった。邪魔をする帝国兵もおらず、容易に玉座の間までたどり着いた。

玉座の間といっても、皆が想像するような豪華な飾りつけがあるわけでもなく、ただ一人残つたガレス皇子が冷たい石の玉座に坐すだけだ。

「ようやく来たか、のろまな反乱軍め。だが、おまえらに用はない。俺が用のあるのは一人だけだ！」

しかし彼が両手持ちの斧を振り上げながら立ち上が

ると、ランスロットが素早くガレス皇子に突撃した。

「ガレス皇子、お覚悟を！」

アヴァロン島で戦った時は鎧の隙間に突き刺すのがやっとなつたのに、ブリュンヒルドはここでもたやすく鎧を切り裂いた。しかし、その下にあるはずのものを見出すことができなくて、彼は目を背けたい気持ちになる。それでもランスロットは、ブリュンヒルドを柄まで通れと突き立てた。

「うおおお！」

ガレス皇子が両手持ちの斧を取り落とし、ランスロットの肩をわしづかみにした。その手が、鎧も変形してしまふほどの力で肩に食い込んでくる。恐怖も心をつかんだようだ。けれども彼は、聖剣をつかんで放さなかった。

サラディンの声が聞こえたのはじきのことだ。

「我は雷いかづち、我は風、ハーネラの力を宿す天より降りし刃やいば！ 受けよ、風が怒り、サンダーフレア！」

魔法使いも魔術師も、サラディンの合図で自身の魔力を彼に向けた。結果、彼が呪文とともに発したのは太い雷の束であり、それはブリュンヒルド目がけて、轟音とともにガレス皇子とランスロットに降り注いだ。

その勢いは玉座の間の窓という窓が割れ、シャングリラ城自身も震えたほどだ。

さらにラウニーとポリーシャたちもどめの一撃を放つ。

皆の耳をつんざくほどの音を突き抜けて、漆黒の鎧から聞こえてきたのは、この世のものとは思われないような恐ろしい叫び声であった。

「ぎゃああああ!!」

だが断末魔は唐突に止んで、鎧はばらばらに崩れ落ちた。

ランスロットも両膝を落としたが、聖剣を床に突き立てて、倒れることは免れた。むしろガレス皇子に与えた打撃の大きさを思えば、彼が火傷を負いながらも生きていられることは、奇跡にも見えた。

しかし、彼が身につけた鎧は碎けて落ちた。ガレス皇子に壊されたこともあつて、鎧として形をなすこともできなくなっていた。

「ランスロット！」

カノープスが、次いでチェスターらが駆け寄った。

「わたしは大丈夫だ。みんな、心配しないで」

「強がり言つてんじやねえよ」

自力で立とうとした彼にカノープスが肩を貸す。

「あれほどの技を受けたのに火傷だけで済んだとは、雷鳴の指輪とは素晴らしい物なのだな」

そう言いながら、チェスターも反対から支えた。

「シキユオーンにも、助けられたよ。雷鳴の指輪と精霊の護符、どちらが欠けても、わたしが、こうして立っていることは、できなかつたに、違いない」

しかし、ランスロットが皆に見せようと手を挙げる、どちらも見ると間に崩れ、四散してしまつた。彼にもそれはわかつていた。サラディンの発した強力な魔法が、この指輪と護符に吸い込まれるのを肌身で感じていたからだ。

「そなたを守ることで役目は終えたのだ」

「ありがとうございます、サラディン殿。これがなければ、わたしは死んでいたかもしれませぬ」

「礼には及ばぬ。そなたに渡した品があつたから、あのような術が使えた。そうでなければガレス皇子はともも——」

「危ない！」

グランディーナがサラディンに体当たりした、ちょうどその場所に暗黒の魔法陣が出現しかけて、すぐに消えた。だがその威力は彼女を巻き込み、傷つけるには十分なほどだつた。

「そんななりになつても動けるとは、大した執念だな、ガレス」

彼女の視線の先にはばらばらになつた鎧があつた。

その右手の部分だけがまるで生きているかのように動き、イービルデッドを放つたのだ。

だが、それはもう力を失っている。代わりにグランディーナの言葉に呼応して動き出したのは兜であつた。目のところに赤い灯が点灯している。それがガレス皇子の生命であるかのように。

「ふははははっ！」

兜から聞こえてきた声は確かにガレス皇子のものだつたが、ランスロットもカノープスも、アヴァロン島で対峙した時を思い出さずにいられなかつた。

「執念というなら、おまえのそれも大したものだぞ、ガルシア。この名に覚えがないとは言わせぬぞ。ほかならぬ、おまえの親がくれた名ではないか。おまえのことを信じている、そこのおめでたい連中に、なぜ本当の名が告げられぬのだ？」

「黙れ！ 私の名はグランディーナだ！」

「これはおかしなことを言うものだ。俺はおまえがガルシアだつた時をよく知っている。おまえはいつ、その名を棄ててしまつたのだ？ アヴァロン島で再会

した時には半信半疑だった。ラシュデイに育てられたおまえが、まさか裏切るとは思わなかったのな、素直には受け入れられなかったのだよ」

「うるさい！ おまえに裏切りなどと言われる覚えはない」

「子が親に楯突くのが裏切りでなくて何だと言う？ おまえがラシュデイに育てられたのは事実だ。親とはそういうものであろう？」

「笑止だな、ガレス。おまえに親がどうこう言われるとは思わなかったぞ」

「くくくつ、俺のことなどよりも、脳天気なお仲間とやらを心配した方がいいぞ、ガルシア。そいつらはおまえが何者か知らなかっただろうし、おまえの正体を聞いて動揺も走つてるようだからな」

「言い訳なんかするつもりはない。確かに私は六歳ぐらいのころまでラシュデイの元にいたのだからな。だからといって私が奴に恩など感じていても思っただか？ その逆だ、奴もおまえも私が殺す。必ず殺してやる！」

ばらばらの鎧が人の姿を取って前に動いた。兜の中で赤い灯が点滅する。だがその姿は、倒される前に比べると動きも遅く、操り人形のようにぎこちなかった。

「ガレス皇子、覚悟！」

誰もが動けないでいたなか、ランスロットがブリュンヒルドで鎧を真つ二つにたたき切った。内部は空洞なのに、まるで生き物を斬るような手応えがあったのが不快だ。それによく身体が動いたものだと思う。

「おおお！ 忌々しい聖剣め！ だが覚悟しろ、ガルシア！ 次に会う時はこうはいかぬぞ！ それまで首を洗って待つているがいい！ その時までおまえが反乱軍にいらればだがな！」

派手な音を立てて鎧は崩れ落ちた。

ランスロットは聖剣に曇りひとつないことを確かめ、鞘に収めたが、その、ふだんならば何でもないような音に、皆が過剰に反応するのを見た。

その視線は彼から、やがてグランデイナーナに集中していった。ガレス皇子との対決で傷つき、相も変わらぬ動きかぬ利き腕を吊った、赤銅色の髪の娘に、まるで突き刺さるような眼差しがその場のほとんどの者から向けられていた。

しかし彼女は、それらを見無視して立ち上がった。ガレス皇子の座っていた玉座に近づき、その裏側に回る。そうと気づいてサラディンも近づいた。

「待たれよ、グランデイナーナ殿」

呼び止めたのはチェスターだ。

「いまのガレス皇子の言葉にあなたから釈明すべきことはないのか？」

「奴の言ったことは事実だ。私が言うことはない」

「ではサラディン殿、あなたはどのようなのだ？」

「わたしもかつてはラシュディンに師事した身、そのことを咎められるならば、言い訳はできぬな」

「しかし、あなたはドヌーブでラシュディンに反旗を翻したではありませんか？」

「ならばグランディーナも解放軍のリーダーとしてそなたたちを率い、ゼテギネア帝国と戦ってきたはず、何を気にすることがある？」

島の落下は止まったようだ。ガレス皇子が倒された時に動作しなくなったのだろう」

「そうか」

そう言つて彼女が消え入りそんな笑みを浮かべたので、カノープスはアイーシャを連れて玉座に近づいた。先ほど彼女が受けたイービルデッドの手当ても、ましてやランスロットの傷もまったく顧みられていなかったからだ。

「ひとまず天空の島から撤退しよう。アラムートの城塞に戻つて、そこであなたたちの話を聞く。それで

良かろう？」

「待てよ、そんな必要ねえだろう？ おまえが誰に育てられようがサラディンの言うとおりに。おまえはここまで俺たちを率いて戦つてきたじゃないか。誰に遠慮することがある？ おまえ以外の誰にもそんなことはできなかつたじゃねえか」

「だが、それでは気の済まない者もいるからな」

「何言つてんだよ、らしくねえぞ！」

「すまない、グランディーナ。アラディンが戻つてきたんだが、牢屋に囚人が閉じ込められているんだ」

「解放するだけでは済まないのか？」

「それがデボネア將軍らしいんだよ」

「何ですつて?!」

すかさず血相を変えてランスロットに詰め寄つたのはノルンだ。

「クアスはどこにいるの？ すぐに案内してちょうだい！」

「ノルン、私も行くわ」

「頼む、カノープス」

「承知した」

グランディーナの傍にはサラディンやアイーシャもいるし、ランスロットも来た。皆の雰囲気は険悪だつ

だが、彼女に「頼む」とまで言われては断れない。カノープスはアラデイとともに、ノルンとラウニイーを伴って地下に降りていった。

実際のところ、シャングリラ城に牢屋などなかったのだが、地下の一室が当てられたらしい。クアスⅡデボネアはそこに閉じ込められていた。

「誰だ？ そこにいるのは？ ガレスは、ガレス皇子はどこだ？」

「クアス！ 生きていたのね、クアス!!」

真つ先に飛び込んだノルンがデボネアに抱きつく。

彼は身体中に鎖を巻きつけられ、憔悴しきった顔で床に転がっていた。

部屋の中には空になって何日も経つていそうな皿があり、汚物などのために酷い臭いが充満していた。

カノープスもラウニイーも部屋に入るのを躊躇ったほどだが、ノルン一人でデボネアを担ぎ出すのは無理だ。やむなく彼とアラデイが入り、デボネアを廊下に引つ張り出して、ラウニイーが急いで扉を閉めた。

「ノルン？ 君か？ どうして？ どうしてこんなところに？」

「くわしい話は後で。いまはその身体を手当てしないと」

「ガレス皇子はどうなった？ 反乱軍が来たんじゃないのか？」

そう言うことから、デボネアは初めてカノープスに気づいたようだ。

「君は、反乱軍の？」

「解放軍のカノープスⅡウォルフだ。あんたとは面識はなかったな」

デボネアは彼の言葉に笑顔を浮かべた。

「そうだったな、君たちは解放軍だった」

「ノルンの言うとおり、いまは傷の手当てに専念するんだな。俺たちも撤退しなけりゃならないし、ちよつと立て込んでるんだ」

「すまない」

「あんたが謝ることじゃないさ」

「カノープス、隣の部屋で殺されていた者がいました、いかががいたしますか？」

アラデイがこつそり耳打ちする。

「知った顔か？」

「おそらくはガレス皇子の親衛隊の一人だと思えますが、顔が判別できないものですから」

「おまえ、デボネアを連れていってくれ。俺がそつちを見に行く」

「承知しました」

ラウニイーもノルンも不思議そうな顔をしていたが、いまはデボネアの方が優先だと思つたらしく、外に出た。シャングリラ城の前庭に池があり、デボネアの汚れた身体はそこで洗うことができたはずだ。

カノープスはアラデイの教えた部屋に行つてみたが、予想どおり、ヴラマンクが無惨な姿で殺されていた。

「あの時、あんたを無理にでも引き止めれば良かったな」

彼の漆黒の鎧は、まるで人の仕事とは思えぬような力で破壊されている。十中八九、ガレス皇子のしたことなのだろう。ランスロットの鎧も、肩当てが凄い力でねじ曲げられていた。

「だけど、俺が言いたいのそんなことじゃねえよ。何のために戻つたんだ、あんた？ ガレス皇子のために戦つてたのに、どうして殺されなけりやならなかつたんだ?! 畜生！」

ラウニイーたちが外に出ると、カノープスを除く全員が外におり、ほとんどの者が発つ支度をしているところだった。デボネアの世話をノルンに任せてラウニイーが見ていると、グランディーナ、サラディン、

ランスロット、ユーリア、アイーシャ、それにカリナというホークマンと魔獣以外の者は先に発つようだ。

「ご苦労だったな。デボネアの様子はどうか？」

「大した怪我は負っていないわ。酷く憔悴していたけれど、体力はあるはずだもの、回復するでしょう。それよりも、あの人たちはなぜ先に発つのかしら？」

「私がいては話しづらいことも多かろう。思う存分、話させた方がいい」

「カノープスも言っていたけど、あなたらしくないわね、そういうの」

「私は独裁者じゃない。聞くべき意見は聞く」

「グランディーナ、まさかと思うが」

「私は解放軍を辞めるつもりも、リーダーを降りるつもりもない。それに話は聞くが聞き入れるとは言つてない」

「ならば、いいんだ」

そこへデボネアとノルンがやってきた。ラウニイーが見たところ、牢で見かけた時よりもデボネアの顔色は多少、良くなったようだ。

「大丈夫か、デボネア？ 酷い目に遭つたな」

「グランディーナか。そうか、ガレス皇子を倒したのか。エンドラ陛下を説得しようとしたのだが、逆に

裏切り者と罵られ、捕えられてしまったよ。どうやら君たちの方が正しかったようだな。虫のいい話だと思っただろうが、このわたしを仲間にしてくれないか？」

「帝国に剣を向ける覚悟はできたというわけか」

「そうだ。この命果てるまで、君とともに」

それから、ようやくカノープスが戻ってきたので、グランディーナは出発を言い渡し、三頭のグリフォンとワイバーンに分乗していくことになった。

「俺は飛んで追いかける。カリナ、つき合えよ」

「いいつつよ」

カノープスとカリナがそれで先に飛び立ったので、残る八人がグリフォンとワイバーンに二人ずつ乗った。グランディーナとデボネアがエレボス、サラディンとノルンがピテュス、ランスロットとラウニイーがピタネ、ユーリアとアイーシャがミニユアスという組み合わせだ。

途中はどこにも寄らず、カオスゲートのところまで一直線ということだった。

「ランスロットハミルトン、あなたはさつき、何も発言していなかったと思うけど、どう思ったの？」

「驚きました」

「それだけ？」

「いえ、とても驚いたのですが、わたしはこの戦いが始まる前に彼女に騎士として剣を捧げました。ですから、その気持ちにはいまも変わりがありません」

「解放軍にはトリスタン皇子もいらっしやるわ。なぜゼノビア人のあなたがそうしないのかしら？」

「お言葉ですがラウニイー殿、一度、剣を捧げた騎士が二君に仕えるなどあり得ません。この戦いが終わるまで、わたしの剣は彼女のものです」

「失礼なことを言ってしまったわね」

「いえ、ご理解いただけで幸いです」

「私はカノープスに賛成よ。リーダーにはトリスタン皇子の方がおふさわしいと思う気持ちに変わりはないけれど、自分で決められない出自を他人にとやかく言われる覚えはないわ」

「皆もそう思ってくればいいのですが、こればかりは命令できるものでもありませんからね」

シヤングリラ城に突入したのは朝方だったが、発つ時には陽もだいぶ西に傾いていた。

グランディーナたちがアラムートの城塞に戻ったのは金竜の月二二日で、チェスターら本隊はそれよりさらに二日遅れた。

そのままグランディーナが解放軍の全体会議を招集したのは、全員がアラムートの城塞に戻った金竜の月二四日のことであった。

会議の開催を前に、二二日に戻ったグランディーナ自身から、留守を預かったアッシュュラ幹部とトリスタン皇子への説明がなされたが、受け取り方は皆、様々だった。

「それほど大騒ぎするような話ではあるまい」
真つ先にそう言ったのはアッシュュラだ。

「確かに外聞は良くないが、だからこそ隠しておいた理由もわかろうというものだ。だがサラディンに訊きたい。問題はなぜラッシュュデイがそのようなまねをしたのかということだ。それも一人や二人ではあるまい？」

「わたしもラッシュュデイ殿の意図がわからぬから彼女を助けたのだ」

「助けたとは？」

サラディンがグランディーナを見やると、彼女は頷いた。だが、言葉を選びながら話すさまは饒舌とは言いかね、彼女にとつても話しにくいことなのだろうと、推測するのは容易だった。

「私には、ともに育った者が何人かいた。そのうち

の一人は双子の兄だが、正確な人数は覚えがないし、いまとなつてはラッシュュデイしか知るまい。と言うのも、理由はわからないが六歳ぐらいの時、殺し合いになったからだ。生き残ったのは私だけだ。みんな、死んだ。サラディンに助けられたのはその後だ」

「六歳の子どもが、殺し合いだと？」

「信じる信じないはあなたたちの自由だ。だが彼らは互いを殺そうとしていたし、私も殺されかけた。だから、私が彼らを殺した」

誰かの喉を鳴らす音が響き、重苦しい沈黙が会議室を支配する。さすがのアッシュュもこのような返答は予想していなかったのだろう。

トリスタン皇子以下、列席者も無言だ。

しかし、グランディーナはゆつくりと話し続けた。

それは長いこと、サラディン以外に知る者もなかった古傷をさらす行為にも似ている。そうすることで、彼女が得られるものなど何もないというのに。

「別に育ての親だからと言つたつて、ラッシュュデイが私たちの面倒を診ていたわけじゃない。親など、奴だつて思つてもいないだろう。それに、奴はたまに来たただけだ。私とは話した覚えもない」

「殺し合った時の状況を話してもらつても？」

ようやくウオーレンが口を開く。場合によっては、グランディーナをリーダーに選んだ責任を彼も問われかねない。

しかし肝心のトリスタン皇子が無言だ。その表情は皆の観察に徹しているようにも見え、何を感じ、考えているのかは察せられない。

「私も、記憶が曖昧だ。多少、順序があやしいかもしれないが、覚えている限りで話せば、私は真っ先に倒された、とても強力な魔法を受けて」

「六歳の子どもが魔法を使えたというのですか？」

「たぶん、そうだ。それまでにそんな兆候はなかった。だから、彼らが魔法を使えたということも知らなかった」

「それはどのような魔法でしたか？」

「私は魔法の心得はないが、アイスストームのような強力な魔法だったと思う」

ウオーレンは黙り込み、考え込んだ。

初めて彼女に遭った時に、ゼテギネア帝国を倒せる、ただ一人の星と思い、皆の反対を押し切って彼女をリーダーに据えたのは彼だ。だが、その星は彼の見聞違いだったというのか、それとも強力無比な力を持つがゆえの両刃の剣だったというのだろうか？

「もしかして、あなたの脇腹の傷はその時のものですか？」

マチルダⅡエクスラインがこわごわ述べた。ラッシュイの名が出た時、彼女は激しい嫌悪感を見せたが、話を聞くうちにそれをそのままグランディーナにぶつけるのは妥当ではないと考えたようだ。

「そうだ」

「ですが、アイスストームではあんなに酷い凍傷にはならないはずですよ」

「あんな魔法を喰らったのは、後にも先にもあの時きりだ。私にも、それ以上はわからない」

「魔法のことならば、サラディンやウオーレンに心当たりはないのか？」

アッシュに促され、ウオーレンはサラディンを見る。

「一つだけ、なくはない」

サラディンが答え、しばらく沈黙してから続ける。

「だがあり得ぬことだ。我々でさえ容易に扱えぬものを、六歳の子どもが使えるはずがない」

「何だ、それは？ もつたいぶらずに話せ」

アッシュの口調に苛立ちが混じったが、サラディンがなかなか答えない訳はウオーレンにもわかっていて、知るからこそ、答えにくい理由もわかるのだ。

「禁呪だ」

「だがラシュデイはバルハラやガルビア半島で禁呪を使いましたぞ」

「ケビンがすかさず突っ込んだ。彼は二四年前の戦争を知る、解放軍では数少ない人物の一人だ。しかも間接的とはいえ、バルハラでの旧ホーライ王国騎士団壊滅の証人でもある。」

「ラシュデイ殿だからだ。あの方の強さに、わたしなど足下にも及ぶまい。だがラシュデイ殿をしても、バルハラやガルビア半島の気候を変えてしまった。禁呪とはそれほど扱いがたい力なのだ」

「その禁呪とやらを六歳の子どもが使ったと？」

「そうではないかもしれない。ただ、より強力な魔法と言われて、思いつくのがそれだということだ。術者の熟練度によつては、ただのアイスストームの威力も変わる。だから確たることは何も言えぬ」

「シャングリラでガレス皇子を倒した時も、使ったのはサンダーフレアであつて禁呪ではありませんまい」

「ウォーレンの言葉にサラデインは頷いたが、アッシュも含めて、皆にはよくわからないことのようにだ。わかるのは、禁呪が誰でも使えるわけではないということだけだ。」

「最初に倒されて、どうして生き延びたのだ？」

「さきほども言つただろう、私が、彼らを殺したからだ」

「簡単明瞭、と言いたいところだが、もう少し詳しく説明してもらえぬか」

「グランディーナは苦り切つた表情を示したが、口を閉ざすことはしなかつた。彼女はもう閉め切られた扉を開け放つてしまつたのだ。皆の好奇心が満足するまで、その扉を再び閉ざすことは許されない。」

「最初に倒されたが、意識まで失つたわけではない。だが、見ていないので、詳しいことはわからない。彼らは殺し合いをしていた。たぶん、魔法によるのだろう。このままでは私も殺される、だから殺したのだ」

「何を使つて？」

「剣だ」

「なぜ剣があつた？」

「私も知らない。そんな物を見たのも持つたのも初めてだ」

「だが使えたと？」

「私の取り柄はそれだけだ」

「グランディーナの表情が失われたが、皆はまたしても言葉を失つた。」

「その時、ラシユデイ殿はいなかったのだな？」

ようやく訊ねたのはサラディンだ。それは話を本筋に戻す役割を果たしていた。

「いない。奴が現われたのは、すべて終わってからだ。私を役立たずと罵った。だから奴は私が殺す」

「解放軍を辞めるつもりはないということだな？」

「そうだ。リーダーも降りない」

ここでアツシユがトリスタン皇子を見たが、彼は無言で、やはりほとんど表情を変えないことがない。

だが、ウォーレンからも助けを求めるような眼差しが向けられたので、ようやく重い口を開いた。

「わたしは彼女を支持する。ゼテギネア帝国を倒すには、それがいちばんの早道だからだ」

「リーダーに就かれる気はないと仰せですか？」

「彼女の方が適任だ。それに解放軍のリーダーの件については、わたしと彼女のあいだで、すでに決着はついている。たとえラシユデイのことがあっても、それを覆す気はわたしにもない。」

今日はこれでお開きにしてもいいかな？」

最後の言葉はグランディーナに向けられたもので、彼女は皆の様子を確認せずに頷いた。

「そうだな」

それでグランディーナとトリスタン皇子、それにサラディンとケインが立つていったが、ほかの者はまだ座っていた。

ランスロットもカノープスも、当事者のいないところでどんな話が出るのかと警戒していたが、旧ゼノビア勢とそれ以外の者とは思うところも異なるようで、この場で話すのは躊躇ためらわれる雰囲気支配している。

特に旧ホーライ勢は旧ゼノビア勢に次いで多い上、ヨハンニシャルマーズを筆頭に解放軍にまとめて加入した。反グランディーナの先鋒はここを中心になりそうなのだが、どこの国にも彼女に替わることのできるリーダーがいらない。

そういう意味でもトリスタン皇子の彼女への支持表明は鶴の一声とも言えた。

結局、皆は一人、二人と、ばらばらに会議室を出ていった。

最後まで残ったのはランスロットとカノープスだ。

「何だか、尻切れとんぼに終わったな」

「皇子のお言葉が重いのだろう。反対することは誰でもできるが、解放軍に残るにしても出ていくとしても、リーダーを任せられる人物がいらないのでは意味がない」

「だったらチェスターたちを待つてねえで、次の目的地へ行っちゃまえばいいのに」

「だが、どこか聞いていない」

カノープスは頭をかいた。

「そういうや、デボネアは？」

「療養中だろう。ノルン殿がつきつきりのはずだ」

「お姫さんもいねえけど？」

「ラウニイー殿はリーダーではないし、デボネア將軍とは仲がいいから、ノルン殿を手伝っていると思う。それと、ラウニイー殿も今度のことではグランディーナの味方だ」

「おまえ、詳しいね？」

「シャングリラでラウニイー殿と同じグリフォンに乗ったんだ。その時にそんな話をした」

立てる音も荒々しく、カノープスは足を卓に乗せて椅子を大きく傾けた。

「たまらねえな、こういうのは。俺たちも初めて知るようになことはあつたが、別に知らなくても差し障りがねえ話だ。あいつがどうして殺し合いを生き延びたかなんて、聞く必要もねえ。よほど、そう言つてやりたかつたぜ」

「わたしも最後の点については同感だが、あの雰囲

気では納得する者の方が少なかつただろうな」

「嫌な話だぜ。この上、全体会議なんてやる必要があると思えねえ」

「グランディーナの意向だ。彼女が言いたいことも言わずに皆の言い分だけ聞くとはい思えない」

「なるほど、目的はそつちか」

「たぶんね」

それで二人は揃つて外に目をやつた。皆の心中とは裏腹に、外には強烈な日差しが照りつけている。ダルムード砂漠に雨が降るのは年に一、二度で、曇ることも滅多にないのだそうだ。

ランスロットと別れたカノープスが魔獣の厩舎に赴くと、ユーリアが駆けてくるなり宣言した。

「兄さん、私、会議には出ないわ」

「何だ、いきなり？」

「私はここで魔獣と一緒にいます。いいでしょう、それで？」

「大将、俺もそうしたいんですけど」

「カリナまで何だよ？」

彼の周りに魔獣部隊の面々が集まつてくる。

と言つても、ここにいないギルバルドとチェンバレ

ン||ヒールシャーを含めても九人しかいない。解放軍でもないばん少ない部隊である。

「おまえらも?」

ロギンス||ハーチやライアンも一斉に頷いた。

「何でこんな時だけ結束してるんだよ?」

「カリナから事情は聞いたんだが、俺も人様の生まれをとやかく言えるようなご身分ではないものでね」とライアン。

「わたしもシャローム地方での恩があります。いまさらグランディーナ殿以外の方をリーダーには思いません」

これはニコラス||ウェールズ。

新参者のオイアクス||ティムも、同じホークマンのカリナの言い分に賛成だと言う。

「だから会議なんて面倒なことは、大将と団長に任せるつてことです」

「本音はそれだな。まあ、確かに、俺たちが全員で行つたら、場所を取るからな」

「間違いなく入りきらないでしょうな」

カノープスの言う「全員」を察して、皆が笑う。

「ギルバルドも反対しねえだろうし、まあ、いいか」それで魔獣部隊はいつもの様子に戻った。

ギルバルドとチェンバレンが戻った時も、カノープスから説明があつて二人は了解し、相変わらずだった。

一方、それ以外の部隊は落ち着かず、事情の知らされない者たちも幹部の様子がおかしいことに気づいている。

何より、シャングリラから戻ったグランディーナが次の目的地を言わぬことも、全員で戻らなかつたことも不自然だった。

しかし当のグランディーナは、幹部への釈明が済むと司令官室にほとんど籠もりきりだった。

もつともランスロットやカノープスが後からアイーシャに聞いた話では、例によつて一日中、寝ていたとか。そうでなかつたら、デネブと改造したパンプキンヘッド改めマッドハロウインの話をしていたらしい。

サラディンも彼女と話すでなし、司令官室の資料を見たり、ダルムード砂漠に足を伸ばしたりしている。

嵐の前の静けさが解放軍を包んでいた。

チェスターたちがアラムートの城塞に戻つたのは金竜の月二四日の午前中のこと、道中はいろいろと話したのか、帰ってきた時には皆の表情が厳しい。

「ランスロットさま」

「お疲れ、オーサ」

いつもにこやかなオーサが、らしからぬ険しい顔をしていたので、出迎えたランスロットは極力いつもどおりに話しかけたのだが、次の瞬間には彼は爆発して、ランスロットに詰め寄ってきた。

「わたしは悔しいです。なぜ、みんながあのようにグランディーナ殿を信じられないのか、わたしには理解できません」

「そんなに大変だったのかい？」

「大変というか、好き勝手なことばかり言っただけ、悪いことはすべてグランディーナ殿のせいにするのです。ラシュディが育ての親だからって、何もあんな言い方をしなくたって良いではありませんか」

「君は気にしていないと言うのか？」

「それは、確かに驚きましたが、冷静になつて考えてみれば、グランディーナ殿が解放軍のために力を尽くしていることぐらい、わかります」

「ランスロットさま！」

「わわっ」

気がつくのと、彼はゼノビア人の若者たちに囲まれていた。そのなかにはシャングリラ遠征に加わった者も

いれば、そうでない者もいる。だが、皆、解放軍の古参であることに違いはない。その分、グランディーナとのつき合いも長いわけで、今回の事態にはいろいろと言いたいことも多そうだ。

「ともかく、こんなところで立ち話も何だから、中庭へ行こう」

それで皆が一斉についてきたが、ランスロットの顔を見て、事情はわからないなりに一緒に来た者まであった。何しろ皆、今日の午後から全体会議としか知らされていない。解放軍が始まって以来、なかった事態なだけに、不安を感じている者も少なくないのだ。

「一体、何の会議だつていうんですか？」

「グランディーナさまについてだつて」

「どういうこと？」

「カシム、あんた、シャングリラに行つてたんでしょ？ 何を聞いたのよ？」

しかし、かしまし娘に問い詰められた彼の声はあまりに小さく、誰にも聞き取ることができなかつた。

オーサがその肩を軽く叩く。

彼とカシムとのつき合いは長く、解放軍の初戦となった蛮勇の土ウーサーを倒した時、ともにランスロットの小隊にいた仲だ。一緒にシャングリラ遠征に

行つたということもカシムにとつては小さくなかつたのだろう。今度ははつきりと答えた。

「グランディーナさまの育ての親がラシュディだつてガレス皇子が言つたんだ。俺やオーサはランスロットさままたは別に帰つてきたんだけど、あんな言い方はないよなつて話ばかりで」

たちまち、その場は大騒ぎになつた。カシムとオーサは困つたようにランスロットを見たが、彼は黙つて首を振つた。

こういう時には何を言つてもしょうがない。時間にならぬほど余裕があるわけではないが、彼らに言いたいことを言わせて落ち着いてからでなければ、人の話に耳を傾けることはあるまい。

そう思つて彼が眺めていると皆は徐々に黙つていつた。その表情は気まずそうでもあり、恥じてもいた。

ラシュディの名はそれほど大きい。しかし、これほどその正体が知られてない者もない。どこの出身なのか、なぜ盟友だつたグラン王を裏切り、ハイランドに与したのか。大陸一の賢者と噂される、その実力はどれほどか。

知られていないから不気味なのだ。不気味な存在であるから、その名が衝撃的なのだ。

「おかしいですよ、そんなこと！」

エマーソンⅡヨイスがことさらに憤慨して言つた。誰もが彼を注視する。

「わたしたちがゼノビア人であることを選べなかつたように、ラシュディに育てられたのはグランディーナ殿の責ではないはずですよ。そんなことを言いつらつても解放軍が得ることは何もありませんか」

「あたしもそう思う」

かしまし娘が口々に同意する。

それについてまた意見が出され、反対したり同意したり、騒がしくなる。

けれども彼らの視線は次第にランスロットに返つてくるようになった。自分たちだけでこうして話していても埒があかないことに気づいて、いちばんの事情通であろう彼の話を聞きたいのだろう。

それでも彼は黙つていた。その場の皆の気持ちがついつにまとまるまで、彼は辛抱強く待つていた。

「グランディーナに言いたいことがある者は、午後からの全体会議に出るといい。事実は事実だ。彼女は言い訳などしないだろう。だが会議に出ないのも君たちの自由だ。魔獣部隊からは、ギルバルドとカノーブスしか出ないと表明があつたところだ」

「グランディーナ殿はラシュデイのことをどう言うていたんですか？」

とエマーソン。

「自分の手で倒すと。ガレス皇子にもそう宣言していた」

「だったら、わたしは出ません」

彼が早々に主張し、賛同する者も現われる。

「グランディーナ殿を信じます」

また賛成の声が上がりかけたが、カノープスが割つて入った。

「話をそう、せっかちに結論づけるものじゃねえだろう？ おまえがそんな言い方をしたら、ほかの奴らは信じるか信じないかの二択を迫られることになっちまうじゃねえか。信じたかったって、言いたいことのある奴もいるだろうが。潔いのは褒めてやりてえところだが、そう単純に割り切れない奴だっているんだぜ」

「もう時間かい、カノープス？」

「どうにも鼻息の荒い連中がいるからな」

そこで彼は皆に向き直った。

「言いたいことがあってもなくても、話を聞きたい奴は出ればいい。」

俺たちも行くこうぜ、ランスロット。席がなくなつち

まうかもしねえぞ」

「その時は、わたしはグランディーナの後ろに立つから、座れなくてもいいよ」

「呑気なこと言つてねえで来い。」

後は自分たちで考えろ」

ランスロットはかなり強引にカノープスに引つ張られていった。後からついてくる者もいたし、会議には出ないことにした者もいた。

四階の会議室は、廊下まで人が溢れ返つて盛況と言うのも不謹慎なぐらいだった。

グランディーナはいつもの席に座っている。

右隣にサラディン、左隣にトリスタン皇子という布陣も前回と同じだ。

トリスタン皇子の側にアッシュ、ウォーレン、マチルダ、ポリーシャと並び、サラディンの側にギルバルド、カノープスと並んで、ランスロットの席も確保されていた。

ケインはトリスタン皇子とアッシュの後ろに立ち、なぜかラウニーまで同じところだ。

ノルンの姿がないのは、デボネアの回復が遅れているからかもしれない。

グランディーナの向かいにヨハンを中心にケビンと

チェスターが坐しているが、なぜかヨハンは居心地が悪そうだ。

その周辺にグレッグやペーミンントが座り、あとこの席には座れた者が雑多にかけ、そうできなかった者のほかに、言いたいことがありそうな者から単なる野次馬まで押しかけていた。

ランスロットとカノープスが席に着くと、サラディンが立ち上がった。皆のざわめきは収まらなかったが、彼はかまわずに話し始めた。

「わたしが進行役を務めるのが適当とも思えないが、話は速い方がよい。早速、始めるとしようか」

すかさずかみついたのはチェスターだ。

「この件について、あなたは中立の立場にはない。僭越ながら申し上げるが、進行役はトリスタン皇子にお願いしたい」

「サラディンを中立でないと言うのなら、わたしも中立とは言えない。断ろう」

トリスタン皇子の思わぬ回答に、チェスターは面喰らったようだ。

「なぜ、そのように仰せられますか？」

「わたしは彼女に替わって解放軍のリーダーになるつもりはないからだ。中立とは言えなからうが、君の

満足するような中立の者とは、いまだに立場を決めかねているということではないのか？ そのような者が進行役を務めるのも適当とは思えないな」

「ですが、解放軍のリーダーがラシュデイの娘であつていいはずはありませんまい？」

「ラシュデイがわたしたちの敵だからか？ ならば、ラウニイーやサラディンも解放軍に在るのは許されないことになる。それはあまりに短絡的な意見だ。解放軍はこれまで、そんな単純な言い分は主張してこなかっただろう？」

「しかし、サラディン殿もラウニイー殿も解放軍のリーダーではありません。二人が帝国と関係があらうが、我々は逆に宣伝できます」

「では逆に訊こう。なぜ、わたしを解放軍のリーダーにと願う？ 答えはわかりきっているな。わたしが神帝グランの息子だからだ。生き残った、ただ一人の王族だからだ。だが、それだけだ。あいにく、わたしは解放軍の結成時からいるわけではない。むしろ、君たちより参加は遅いくらいだ。それに、わたしは解放軍のために貢献してきたつもりもないし、これからも解放軍のために身を粉にして働くつもりもない。そのような仕事は彼女に任せよう」

「ですが、ラシユデイの娘が解放軍のリーダーとは、あまりに外聞が悪すぎます。帝国軍がこの点を喧伝してきたら、人心はたちまち離れていきましよう。解放軍と名乗ることさえできなくなるかもしれない。それにラシユデイのことだ。我々の知らないところで罫を仕掛けていないとどうして言えましよう？ 確かに現状、我々は帝国相手に勝ち進んでいる。それがいざ、ラシユデイを前にした時にこの娘に裏切られないと、誰に保障できますか？」

「そのことならば、彼女から答えてもらった方がいいだろう」

突然、話を振られて、興味なさそうに窓の外を眺めていたグランデイーナが振り返った。

「そんな保障、誰にもできるわけがない。私だけでなく、あなたたちも同じことだ。あなたたちにラシユデイが罫を仕掛けていないと誰に保障できる？ そんな話、するだけ無駄だ」

「そんな詭弁には騙されんぞ！」

「チェスターが勢いよく立ち上がったが、対するグランデイーナは座ったままだ。」

「私の言うことは詭弁で、あなたの言うことは正論か。つまらない話だな。物心もろくについていない時

のことをことさらに責められても迷惑だ。最初から事実を話さなかったことをあなたたちに責められてもしょうがないと思っっているが、責任の取れないことを言われてもお話にならない」

「ラシユデイの娘であることを責任が取れないと言っているのか？」

「そうだ。私が選んでそうなったわけじゃない。誰も親は選べない。責任など取れるものか。それに、あなたはさんざんラシユデイの娘と繰り返しているが、私は奴を親だと思っただけで一度もないし、私が覚えていた限りでも奴が親らしいことをしたこともない。親と言っただけだ」

チェスターがとつさに反論できずにいると、グランデイーナは身を乗り出した。

「冷静に考えてみてくれ。なぜガレスがああ時にあんなことを言ったのか？ 今度のことで得しているのは誰か？ 私でもあなたでもない。解放軍の誰も得などしてない。利を得たのは帝国だけだ。それだつて、これから手間暇かけて宣伝し続けなければ、役に立たない話だろう。ガレスは私たちを分裂させるために、あんなことを言ったんだ」

「グランデイナー殿の言うとおりだな。ラシュディを憎むおぬしの気持ちはわからなくもないが、どう考えてもラシュディとガレス皇子に踊らされているとしか思えん。少し頭を冷やせ、敵に翻弄されるなど、おぬしらしくないぞ」

チェスターはケビンを睨みつけた。相手が彼以外の誰でも頭ごなしに怒鳴りつけただろうが、この時はいろいろなものと一緒に呑み込んだようだ。立てる音も荒々しく椅子に座り直した。

だが、てつきりチェスターともども反グランデイナーの先鋒となると思われたケビンのこの反応は、ラッシュトやカノープスには良好と見えた。

「サラデイン殿、あなたは以前にグランデイナー殿を助けた方だ。ラシュディとの関係をどのように考えられたのですか？」

その質問も、好奇心丸出しの話に比べれば、よほど理性的である。

「育ての親が誰であろうとグランデイナーはグランデイナーだ。だが、そなたたちのそのような対応は予想していた。だから何も言わなかったのだ」

「それではあなたは育ての親がラシュディであろうと何も問題はないと仰るのか？」

チェスターが即座にかみついたが、サラデインの音は穏やかで、相手のけんか腰の態度も柳に風と受け流すかのようだ。

「そうだ。こんなことをしているあいだにも帝国がどのような手を打つてくるかわからぬ。わたしは時間を無駄にしたくない。こんな会議など辞めて、結論を出すわけにはいかぬのか？」

「結論だど?! その娘を解放軍のリーダーにしておくという結論か?!」

「トリスタン皇子が辞退された以上、ほかに誰ができると言うのだ? そなたの言い方では誰も引き受けるとは言えなくしてしまった。あるいはそなたがやるというか? そうできぬことはそなた自身がよく知っているはずだ」

サラデインの言葉にチェスターは反論できないようだ。だがその表情からは歯ぎしりの音が聞こえてきそうなほどで、そのために会議室には重苦しい沈黙が下りていた。

しかし、そのような言い方をすれば、トリスタン皇子がリーダーを断った時点で話の趨勢は見えていたのだ。それを先も見ずに引き伸ばしたのはチェスターの方だった。

すかさずグランディーナが立ち上がる。彼女は腰の剣を抜き放つといきなり自分の前の卓にたたきつけ、皆の視線をかなり強引に自分に集めた。主に反対派を見据えたその眼差しは、相も変わらず手負いの姿でありながら、誰にも反対を許さぬ強い意志を見せつけているかのようだ。

「あなたたちの言いたいことは、どうやらそれで終わりのようだ。ならば、私の言い分はこうだ。私は最初からあなたたちを利用するつもりで解放軍を立ち上げた。一人でゼテギネアへ行くよりもその方が楽だろうと思っただから。ラシュディとガレスを倒す。そのためには聖剣だろうと天空の三騎士だろうと利用できるものは利用させてもらう。だから、あなたたちも、せいぜい私を利用するがいい。この剣の腕前もこの身も名も、利用できるものはいかようにも使うがいい。それでゼテギネア帝国を倒し、ラシュディとガレスを討てるのならば安いものだ。そうではないのか？」

「何をぬけぬけと言うか！ それにご自慢の腕前とやらはバルモアから戻ってきて以来、動かぬままではないか。この先もいつ動くのかもわからぬ、それでどうやって利用せよと言うのか聞きたいところだ」

「そんなことはあなたに心配されるに及ばない。い

ままで、私の腕が動かなくて不都合があつたか？」

「何を言うか。そのせいでアラムートの城塞攻めでは死者を出したのだぞ。シャングリラでは無事で済んだが、この先、また同じことがないとは限るまい？それが不都合でなくて何だというのだ？」

「戦に死者はつきものだ。現に私たちは帝国軍を殺している、解放軍だけ死者がなくて済むということはあるまい」

「だったら、死者に対して、どう責任を取るつもりだ？」

「そんなものはゼテギネア帝国を倒してから考える。案ずるな、誰もあなたのせいだとは言うまい」

「何だと?！」

「そうだ、やつと合点がいました。チェスター、あなたは誰かの死をグランディーナ殿のせいにしたいたいだけなのではないですか？」

「何を言うか、ヨハン?！」

「確かにわたしたちにもラシュディを倒したいと思う気持ちはあります。ですが、あなたの反応は過剰だ。何かあると考えない方がどうかしている」

「ならば二人ともそこら辺でやめてくれ。ホーライ王国の同志として、また友として、このような事態に

私怨で動くような恥さらしな真似はごめんだ」

「ケビン?!」

解放軍一恰幅の良い彼が立ち上がると迫力がある。ましてやチェスターを見下ろした視線は冷たく冴え、自分が睨まれたわけでもないのに、多くの者が肝を冷やした。

この二人が親友同士であることは皆知るところだが、その所作は対照的で、チェスターの動に対し、ケビンは静と言われる。訓練の最中でも彼が雷を落とすことは滅多にないものの、ひとたび落ちれば、その重みは解放軍でも随一の重量級なのだった。

そのケビンがうるさ型のチェスターを非難して立つたのである。二人の周りから離れたくなるのも人情というものだろうが、あいにくと会議室には人が入りすぎていた。押し合いが始まって、廊下までざわついた。

しかしケビンが席を離れたので、皆が一斉に黙る。彼はそんな者たちには目もくれず、真っ直ぐにグラランディーナを指した。

親友に恥とまで言われたもので、さすがのチェスターも黙り込んでしまっている。

皆が見守るうちにとうとうケビンはグラランディーナの目前まで来て、愛用の長槍をその前に置いた。

さすがの彼女も彼を無視するわけにはいかない。不思議そうな顔で見上げている。

「グラランディーナ殿、このたびは我がホーライ王国の同志が事を大きくしてしまったことをお詫びいたす。ゼテギネア帝国を相手に一丸とならねばならぬ時に、解放軍分裂の危機を招くようなことをするとは我が不覚のいたすところ、どのような罰もお受けする」

「何を言うのだ、ケビン? 騒ぎを大きくしたのはわたしたち、おぬしが——」

「おぬしでは意味のないことがわからんか! あれだけ言いたい放題に言っておいて、いまさら罰を受けられないものだ。おぬしは黙っている!」

「何だと? おぬしの出しゃばりになど助けられたくないわ!」

「出しゃばりだなどと、おぬしに言われる覚えはない!」

「二人ともいい加減にしてください!」

ヨハンが声を張り上げなかつたら、ケビンとチェスターはいつまでもそうしていたか、とつくみあいの喧嘩まで始まっていたかもしれない。しかし彼の言葉に二人は我に返り、ばつが悪そうに黙り込んだ。

グラランディーナが静かに応える。

「誰にも罰など与えるつもりはない。それに、私がリーダーであることで解放軍にいられないと思う者は立ち去るがいい。私はあなたたちを引き止めようとは思わない」

「し、しかし」

「私は誰も裁かない。私の仕事はゼテギネア帝国を倒すことだけだ。不満がある者は去ればいい。また解放軍に戻ってくるのも吝か^{やぶさ}ではない」

急先鋒だったチェスターが黙ってしまったいま、反論の声はもはや上がらなかつた。それにカノープスから見れば不器用なまでに同じ態度を貫くグランディーナに、疑いを抱く者はいなくなっていたのである。

彼女は立ち上がり、皆を見渡した。会議室から出ていこうという者はいない。

「話が済んだならば、あなたたちに紹介しておく者がいる。」

入っていいぞ」

現れたのはデボネアとノルンだった。シャングリラで見かけた時のやつれはかなり回復したようで、以前の精悍さを取り戻している。彼は皆を見回すと、頭を下げることなく、こう言った。

「ゼテギネア帝国の四天王だったクアスⅡデボネア

だ。故あつて解放軍に加わることになった。よろしく頼む」

皆はざわめいたが拒絶するような反応は見られず、むしろ思わぬ大物の参戦を歓迎するような空気さえ漂った。

グランディーナが受けるように話を続ける。

「それと我々の次の目的地だが、ガルビア半島へ向かう。そこに天空の島へ至るカオスゲートがあるのと、影の報告では四天王の一人、フィガロがいるからだ。

目的はラシュデイの護衛だが、奴は我々が着くころにはいないと思つて間違いないだろう。今日はシャングリラから戻ったばかりの者もいる。明朝、出発するので各リーダーは至急、遠征に加わる者を選べ」

「フィガロがいるのなら、わたしも行く。彼とは親友同士だ、説得したい」

「良からう。その代わり、あなたの小隊には、ゼノビアで加わった部下たちを入れるぞ」

「望むところだ」

「私も一緒に行くわ」

「ノルン、君には危険だ」

「いいえ、もう絶対に離れない。今度、あなたに何かあつたら、私は死にます。足手まといにはならない

わ、クアス」

「しかし」

「私も行くわ、デボネア。フィガロ將軍も知らない人ではないのだから、いまは敵だからといって、見過ごすわけにはいかないでしょう？」

「ありがたいのですが、ラウニー殿」

「堅苦しい言い方はやめましょう。私たちはともにゼテギネア帝国と戦う同志なのではないかしら？」

「はい」

そのあいだに皆は解散し、リーダーたちが集まって、誰を行かせるか話し込んでいる。

シャングリラから帰ってきた者たちは適宜休んで、遅くなった昼餉の支度も始まっていた。

結局、最後まで会議室に残ったのは、ランスロットにギルバルド、それにカノープスだった。

「意外と大したこと、なかつたな」

「十分、大したことだったように思うがね。だが、チェスターはトリスタンさまのご意向は知らなかつたのかもしれないな」

「一昨日の話を聞く暇もなかつたらうからなあ。

まあ、あいつの動機が何であれ、最初からアツシユの言つたように大したことじゃなかつたのさ」

「人の噂も七五日と言う。皆もそのうちに気にしなくなるだろう。解放軍がここまで実績を積んできたのは幸いだつた。これがもつと早い段階のことならば、取り返しのつかない事態になつていたかもしれない」

「そうだな」

「というわけで、せつかく全員、揃つてるんだ。今夜はひとつ無礼講といかねえか？」

「カノープス、明日からガルビア半島に行くんだぞ。そんな呑気なことを言つてられないだろう」

「堅いこと言うなよ。」

たまにはホーライの連中と飲んでみるのもいいかもしれねえぜ？」

「あんなことがあつた後だからな。酒に流してしまうのも悪くないかもしれん」

「ギルバルド、あなたまでそんなことを」

「参加するしないは個人の自由だ。」

「さあ、行こうぜ。とつと支度しておかないとな」
「だからつて、君はわたしが行かない自由は認めてくれないだろう？」

「おまえのは義務だ」

「そうだな。いずれ国を担おうという人物が宴会にも出ないような堅物では部下が困る」

右からカノープス、左からギルバルドがランスロットの腕をつかんだ。

異論も反論も許されず、彼が引きずられていくのを大勢の者が目撃した。それで、何のおふれもなかったにも拘わらず、夜は宴会だという話が広まって、ごく少数の者を除いて、これまた大勢が参加したのだった。しかし、ランスロットにとつてせめてもの慰めは、ケビンやチェスターも参加して、酒の席とはいえ、大いに盛り上がったことであつた。

金竜の月二五日、解放軍はアラムートの城塞を發つた。海路、テグシガルパを経由して、ミナチトランに渡り、マタガルパから街道を南下していった。

目指すガルビア半島へは八日もかかる。遠征隊はシャングリラへの遠征部隊とほぼ同規模で、いちばん大きな違いは、ライアンとドラゴンたちがやつてきたことだった。

「デボネア殿、お久しぶりです」

「ステイング、君も解放軍にいたのか。」

「ノルン、すまないが彼と二人だけで話したいんだ。席を外してくれないか」

「その方はどなたですか？」

「彼はステイング＝モートン。ゼノビアにいた時のわたしの副官だったんだ」

「わかりましたわ」

彼女が洩々とも立ち去つたのを見送つてから、デボネアはステイングに頭を下げた。

彼の上官は、四天王まで上り詰めた人なのに気取つたところがない。デボネアのような清廉潔白人物がなぜゼノビアに左遷されたのか、当時は理解に苦しんだものだ。

「すまない。君には一方的にゼノビア城での責任を押しつけてしまったな。それを、ぬけぬけと解放軍に参加してと思うだろうが、かつて四天王だった者として、わたしはゼテギネア帝国をこのままにしておくことができないのだ」

「ご安心を。わたしは何も、あなたに恨み言を申し上げようと思つて来たものではありませんから。ただ、あなたと話をしたかったです」

「なぜだ？ 君の立場から言つたら、相当、責められただろうに」

「解放軍は誰も責めませんでしたし、スラム・ゼノビアの住民たちも、わたしたちを責めるような気力な

んでありませんでした。わたしは、あなたの代わりに皆の武装解除と解散をただけです」

「それは良かった」

デボネアが安堵したような笑みを浮かべた。

気さくな人柄といえば聞こえはいいが、彼は物事をあまり深く考えるたちでもない。

「ですが、解放軍に加わったのは、あなたに恨み言のひとつも言おうと思っただけなのですよ」

デボネアの顔色が変わった。さすがにあれこれ考え、それでもステイングが「恨み言を言うつもりではない」と言っただけに落ち着いたようだ。

「それは、なぜやめたのか、訊いてもいいかな？」

「シャングリラへの遠征には、わたしも加わっていません。あなたがラウウニー殿やノルン殿に付き添われてきたのを見た時に、そんな気はなくなっただけです。あなたが一人で逃げたと恨んでいましたが、わたしも解放軍でのんびりと過ごしてきました。恨む筋合いなどなかった、お話ししたかったのはそれだけです」

「それは格好悪いところを見られてしまったな。陛下を説得しに戻ったつもりが、裏切りを罵られて、気がついたらガレス皇子に連れられて、あんなところになっていたからな」

「抵抗もされなかつたんですか？」

「陛下の兵に手を出すわけにはいかないさ。それに王宮で殺傷沙汰を起せば、問答無用で首をはねられてしまうし、騎士としてそんな不名誉なこととはできないだろう？」

「ですが、捕らえられれば、何をされるか、わかつたものじゃないですよ！」

「君が驚くこと、ないじゃないか」

「申し訳ありません」

「帝国にはまだヒカシュー大將軍がいらつしやる。

いくらガレス皇子でも、大將軍配下の四天王を無断で殺すような真似はなさらなかつただろう」

「そうは仰いますが、デボネア殿、あのままシャングリラ城で放置されていたら、さすがのあなたも殺されていたのではありませんか？」

「だが、そうなる前に君たちが来たじゃないか。そんなに案じたものではないよ」

「はあ」

「それより、ゼノビア守備隊から解放軍に加わったのは、君とボブソンとグレッグのほかにいるのか？」

グランディーナの命令で、デボネアをリーダーとする小隊には、その三人とノルンが加わっている。

「治療部隊にエオリアークセジュがいます。シモンズ・イルジークラーもいたのですが、アヴァロン島でガレス皇子のイービルデッドを受けてしまい、復帰できませんでした。ほかの者はどうしたか、ゼノビアで別れて以来ですから、消息はわかりません」

「そうか。皆、無事に戻れたらよいのだが、ゼテギネア帝国は敗残兵に厳しいから、そうもいかないだろうな」

「デボネア殿こそ、ご家族はいらっしゃらないのですか？」

「ああ。わたしは身内がいらないから、早くからザナドゥの軍人養成学校に入ったんだ。ヒカシユー大將軍のおかげで学費も免除していただいたのでね、あそこが故郷みたいなものなんだ。だから、人より言いたいことが言えたのかもしれない」

デボネアは快活な笑顔を見せると、ステイングの肩を軽くたたいた。

「ラウニイ殿にも言われたが、わたしたちはともに解放軍で戦う同志だ。敬語はやめにしよう」

「はい、デボネア殿」

こうして解放軍は南下していった。

夏の日差しがいよいよ厳しく皆に照りつけるなか、ある日、突然、南からの風がはつきりと空気の変わることを告げる。二四年前の戦争でラシユデイが使った禁呪のため、ガルビア半島とバルハラは年中、雪の消えない冬に、気候まで変えられてしまったからだ。

ライアンの四頭のドラゴンに積んできた冬服が皆に配られ、先に進むにつれ、防寒具や雪靴が加わった。持ってきた天幕も冬用の厚手の物だ。

解放軍のほとんどの者が雪上での戦いには経験がない。最初のうちは季節外れの雪にはしゃぐ者も少なからずいたが、ガルビア半島に近づくほど容赦のない寒さが間断なく襲いかかり、皆はだんだん無口になっていった。

「順当に進めば、ゼテギネアを攻めるころには冬だ。いまから雪上での戦いに慣れておいた方がいい」

そう言ったグランディーナは皆ほど厚着をせず、雪さえも彼女の足は止められないと見えた。

解放軍がガルビア半島の入り口、スントバルに着いたのは雷竜の月八日、折悪しく天候も悪化し、ゼテギネアの東大陸では滅多に見られなかった吹雪となつて、風のうなりとともに渦巻いていた。

「先陣はライアンに任せる。帝国軍は雪に強いプラチナドラゴンを投入しているから、そこにプロミオスをぶつける。デボネアとラウニーがこれに続け。あなたたち三人の隊はガルビアを目指せ。フィガロと戦うのはデボネアに任せる。説得できるようならば、解放軍に迎えるのも吝かではない」

「もちろんだ」

ライアンの連れてきたサラマンダーのプロミオスが、わずか一晩で焰竜フレアブラスに進化したことは、解放軍中に知れ渡っていた。

フレアブラスは最上級ドラゴンの一種で、炎そのもののような存在であり、吐く息もサラマンダーとは比べ物にならないばかりか、スーパードラゴンという魔法まで操る。鈍い赤色に変わった鱗は、興奮すると火の粉を帯び、ますます容易に操れなくなる。

通常、ドラゴンの進化は個体で行われることはない。ドラゴン、下級ドラゴン、上級ドラゴン、最上級ドラゴンのどれが生まれるかは、その親によって決まるからだ。

ドラゴンの経験は卵を通じて親から子へ伝えられる、というのが竜使いたちの定説だ。だが全てのドラゴンは一生涯に一つしか卵をなすことができないため、野生

のドラゴンは先祖の経験が蓄積されにくいので人が飼った方が上級ドラゴンを得やすいとも言いが、最上級ドラゴンの卵が得られた例は稀である。

なにしろライアンも聞いたこともなく、もちろん最上級ドラゴンを使うのもまったく初めてのことで、よくわからないのだと言う。フレアブラスが人に使役されることも、滅多に聞かないそうだ。

幸いなのは、プロミオスがライアンの命令に従うことで、味方とあれば、これ以上、心強い存在もない。

しかも今回は、念のために、フレアブラスとブラックドラゴンしか連れていけない。さすがのライアンも、最上級ドラゴンを含めて四頭も操るのは無理と判断したからだ。

「いかんせん禁呪にさらされたって土地だ。ガルビアから帰ってきたら、メラオースがデスパハムートになつてたつて、俺は驚かねえよ」

「大丈夫よ、その時もちゃんと私が面倒を診るわ」
実際、ギルバードとユーリアがいなければ、ライアンはにっちもさつちもいなくなっていただろう。

プロミオスが鼻孔から真つ白な息を吐き出しながら、解放軍の先陣を切つて歩み始める。

その足下で雪が溶けて水たまりが出現したが、ドラゴンが足を離れたそばから凍りつき、はつきりと足跡を刻んでいった。

降りしきる吹雪をものともせず、フレアブラスは進んでいく。ライアンとギヤネガーは、その陰に入って、雪を避けながら歩いた。

彼らから少し離れて、デボネアとラウニーの小隊が続いていった。

それ以外にも町の解放を命ぜられた各小隊が、時間を空けて発つ。

とうとう最後までスツツバルに残ったのは、グランディーナとギルバルドの率いる小隊のみとなった。

「私たちはカオスゲートを探しに行く」

「お気をつけて。心当たりはあるのですか？」

「サラディンが言うには、北の山間だそうだ。あなたたちも帝国軍には気をつけろ」

厳寒のガルビア半島にプロミオスを投入したグランディーナの読みは的中した。

まともに戦えば手こずるプラチナドラゴンやバハムートが、業火を受けて木偶のように倒されていく。

フレアブラスの、唯一と言ってもいい弱点は寒さだ

が、通常の進化をたどらなかったプロミオスには、体内から噴き出す炎も持て余し気味のようで、ライアンはここがガルビア半島なのか、疑うほどだったと言う。

おかげでデボネアとラウニーに率いられた小隊は、ほとんど戦闘を行わずに半島の先端まで行くことができた。帝国軍が頼みの綱にしていたドラゴンたちを、プロミオスがなぎ倒していったので、戦意を挫かれ、戦いたがらないことも大きかった。

また彼らは、反乱軍ならぬ解放軍にデボネアが加わったことを聞いて、かなり驚いたようだ。四天王はまだ三人、帝国にいたるとはいうものの、一人でも反旗を翻したということは、ゼテギネア帝国の落日も遠くないと思わせたのかもしれない。

一方、グランディーナはサラディンの知識を頼りにカオスゲートの位置を特定しようとしていた。ブリュンヒルドを抜けばカオスゲートが現われることはわかっているが、さすがのカノープスの視力でも吹雪の向こうを見通すことはできなかったからだ。

五人はガルビア半島の北東に広がる山岳地帯に入り、サラディンの案内とカノープスの先導で北上した。

「何だつて、こんな不便なところにカオスゲートつ

てのはあるんだ？ ダルムード砂漠とかアンタリア大地とか、辺鄙なところばかりじゃねえか」

「ぼやくなぼやくな」

「カオスゲートは人が造ったものではないからだ。

この土地は力を集めやすい。大地には力の流れるところと、力の集まりやすいところがあるのだ」

「ラシュデイがブリュンヒルドなしでカオスゲートを開けられるのはその力のためか？」

「わたしにはわからぬな」

サラデインは尾根から見下ろし、深く落ち込んだ谷間を指した。

「今日はおそこを調べて終わりにしよう」

「しかし、こんなところにカオスゲートがあっても、今度は軍で来なきやならねえ。天空の島に行くのも一苦労だ」

「そうだな」

このウプサラ山地はそれほど標高が高いわけでもないが急なわけでもないが、決して止むことのない降雪が進軍を邪魔するのだ。

彼女たちはカノープスの助けも借りながら下りていったが、彼が皆を止めたのは、ずいぶん底に近づいたからのことだった。

「どうした？」

「いや、雪に隠れて見えなかったんだが、変な物があるからよ」

「変な物？」

「人里があつたわけじゃあるまいし、こんなところに人形があるなんて、おかしいじゃねえか」

「人形？ いかん！」

その人形が雪の中から立ち上がった。女の子が遊ぶのに使いそうな、木製の頭と手足を持った一バスくらいの大さきの人形だ。だが、カノープスの視力は、人形の周囲にたちまち細氷が生じるのを認めた。急速に気温が下がっている証拠だ。

と気づくより速く、彼女たちを灼熱の炎の壁が取り囲み、一瞬遅れて猛烈な吹雪がその周囲を吹き荒れた。

「サラデイン！」

グランディーナが彼を支え、カノープスも同時にアイーシャを庇った。

だが、彼女らの努力を嘲笑うかのように、炎の壁が外側から凍りついてゆく。

カノープスは天井をふさがれる前に、アイーシャを抱えたまま、上空に飛び出した。

「グランディーナ?!」

彼らの足下で氷の柱が崩れた。崩れる直前に、サラデインの構えた杖が燃え上がるのが見えたが、それも氷の下だ。

「ランスロット！ サラデイン！」

即座に氷をはね除けたのはランスロットだ。いつも持ち歩いてる楯を、彼は使ったのだろう。

しかし、グランディーナもサラデインも立ち上がってこなかった。

彼らは急いで二人を氷から掘り出し、天幕を設置した。グランディーナはその場から動くことができず、サラデインは気絶していたのだ。彼の杖は炭となり、両手にひどい火傷を負わしていた。

三人は最初、グランディーナも気絶しているのかと思っていたが、そうではなかった。彼女は氷の下にうずくまり、激しく身体を震わせていた。サラデインの杖が当たったのか、顔に火傷を負っていたが、歯の根も合わないほど震えていたのは、そんな傷が原因ではなかった。なにしろカノープスが彼女を抱えようとした時、激しく腕を払われたぐらいだ。

「アイーシャ！ ちょっとあいつを診てやってくれ。いきなり腕を払われて、どこが悪いのかわからねえ」

「右脇です。ガルビア半島に来てから古傷が痛むと

言うので、ラウダナムを処方したことがあります」

「ラウダナム？ そんなにひどいのか？」

アイーシャを手伝っていたランスロットが顔色を変えたが、カノープスは先にグランディーナを連れに行った。話を聞きたいのはやまやまなのだが、雪の中で震える彼女をそのままにしておくわけにはいかない。

天幕は五人で休めるように、いちばん大きな物を借りてきていたが、やはりカノープスには窮屈だ。その上、てっぺんから煙が出せるとはいえ、なかで火を焚くのも決して好ましくないが、この厳しい寒さではそんなことも言っていられない。

「それで何だ、ラウダナムって？」

「阿片の溶剤だよ。鎮痛剤にもなるんだ」

「だけど、阿片には強い中毒性があるんだろう？」

「でも、強力な鎮痛剤でもあるんです」

話しながらアイーシャは手早く小瓶の液体を計り、グランディーナの傍まで行った。

アイーシャを見つめる顔は血の気が引いて白く、灰色の眼差しにもいつもの強さが無い。何より、痛みに震えるところなど、グランディーナはいままで見せたことがなかった。アヴァロン島でガレス皇子のイービルデッドを喰らい、全身から出血した時でさえ、彼女

は諷めるマチルダを叱咤したではないか。

ランスロットもカノープスも事情が呑み込めず、かける言葉が見つからなかった。

「大丈夫よ、グランディーナ」

アイーシャが震えの止まらぬ頭を優しくかき抱いた。「サラディンさまは気を失っていらつしやるだけ、私たちを守ろうとして力を使い果たしてしまわれたのでも休めば良くなるわ。だから、あなたもラウダナムを飲んで休みましょう。ね？」

彼女が頷いたので、カノープスは慌てて寝具を伸べた。そこへランスロットが右脇に触れないよう気を遣って抱え、グランディーナを横たえてやる。

アイーシャは毛布の端を折り込んで、まるで母親のように微笑みかけた。

「おやすみなさい、グランディーナ」

こんな時でなければ、拍手喝采したくなるような腕前だ。しかも彼女はそのままサラディンの側に座り直し、途中で止めてしまった火傷の手当てで始めた。

「何か手伝うことはあるかい？」

「いいえ、ランスロットさま。サラディンさまも呼吸が落ち着いてこられたので、もう峠は越えたと思いません。私が起きていますから、お二人ともお気遣いな

くお休みください」

「じゃあ、俺が先に見張りに立つ。後で起こすから、替わってくれや」

「待つてくれ、カノープス」

外に出ると真つ暗で、相変わらず雪と風が止んでなかった。月も星も見えないので、ひどく暗い。冷寒地の用の厚い天幕とはいえ、完全に密閉することは不可能だ。この天幕は闇のなかでは絶好の目印になるだろう。だが、スツバルを発つて以来、帝国軍とは遭つていない。

「驚いたな」

「グランディーナに？ それともアイーシャか？」

「強いて言えば後者だ。さすが大神官の血は争えないつていうか、頼りになるな」

「わたしたちだけではどうしようもなかったしな」

「ああ。だけど、あんなことを黙っていたのは反則だぜ。治つたら、とつちめてやらねえと」

「お手柔らかに頼むよ。彼女にとつても予想外の事態だったんだろうし」

「俺が言いたいののは、知っていれば、もつと気を遣つてやれたつてことだ。だいたい、あいつは隠し事が多すぎるんだ」

「吹聴するようなことではないから黙っているんだろ。ラシュデイのことも傷のことも、知られないで済めば、黙っていたいことばかりだ」

「おまえ、ものわかりが良すぎだぞ。まるで俺が頭の硬い頑固者に見えるじゃないか」

「誰もそうは言っていないが、人にはそれぞれ役割というものがあるからね」

バルモアでもそんな話をしたことを思い出して、カノープスは黙り込んだ。

「なあ、関係ねえけど、魔法つて杖がなくてもできるのかな？」

「ずいぶんと長く二人で黙っていて、またカノープスから声をかける。」

「さあ？ わたしもよく知らないが、魔法使いは皆杖を持っているな」

「サラディンの杖がなかったら、やばいのかな？」

「その時はサラディン殿が仰るだろう。だが両手に火傷を負っていて、魔法は使えないのじゃないか？」

「あっ！」

その時、カノープスは唐突に人形のことを思い出した。さすがの彼にも、こう暗くは探せないが、夜が明けのを待っていたら雪に埋もれてしまう。天幕に

戻って薪を取ると、彼は当たりをつけて人形を探した。ランスロットもすぐに事情を察したが、彼が火を持ってきた時には、カノープスは雪の中から件の人形を見つけ出していた。

「これが君の言っていた人形かい？」

「そうだ。サラディンに見せたら何かの役に立たないかと思つてな」

「ランスロットさま！ カノープス！ 葡萄酒を温めましたから、召し上がりませんか？」

「いま行くよ、アイーシャ！」

彼女に言われるまで二人は気づかなかった。寒さにさらされて、自分たちも歯の根が合わなくなつていたことに。

翌日も雪は止まなかったし、風も相変わらずだった。

それでもランスロットたちを安堵させたのは、アイーシャの言つたとおり、サラディンもグランディーナも小康状態になったことだった。

しかし、サラディンの火傷は一晚で治るようなものではなかったし、グランディーナもラウダナムを飲まねばならなかった。

今日一日、ここに逗留しなければならぬことは誰

にもわかっていた。

ランスロットとカノープスは、夜が明けるのを待って、カオスゲートの位置を確認した。昨晩、人形を掘り出した、ちょうどその場所にそれは出現した。人形が意図的に置かれたことはこれで疑いようがなくなつたし、誰の仕業かも明らかだつた。

二人からカオスゲートの位置を確かめたことや、人形のあつた場所などを聞いたサラデインは嘆息して頷いた。

「あの方のされることは、いつも、わたしの想像を上回る。まさか、こんな人形を使われるとは、思いもよらなかつた」

「それはどういう用途に使うのだ？」

「本来は人形使用の道具なのだが、望む者の一部を作製時に混ぜることによって、何分の一かでもその者の力を持つようになるのだ」

「東方にそういう呪術道具があることは聞いているが、力には魔法も含まれるのか？」

「できるということだろう。だが、わたしはこんな使い方は想像もしなかつた。この人形が敵の手に渡れば、不利になる可能性もあるからだ」

「不利になるとは？」

「この人形の中にラシュデイ殿の一部がある。それを取り出して呪術をかければ、あの方に打撃を与えられるかもしれない」

「だが奴に限って、その対策を施していないとは思えない」

「そうだ。わたしなどには破られぬとの自信があるのだろう。使い道がないとは思わぬが、すぐに燃やすのが賢明だ」

そう言うと、サラデインは不自由そうに横になり、目をつぶつた。話はできてもまだ本調子というわけではないのだろう。

天幕の隅では、徹夜の看病疲れでアイーシャが休んでいる。

グランデイナーが立ち上がり、外に出た。ラウダナムを飲む時にひどく嫌そうな顔をし、アイーシャもそんなことを言っていたが、一見、いつもと変わらないように見える。

「うるさいな」

彼女はそうつぶやき、左手で耳をふさいだ。

「ここは、風がうるさすぎる」

「外は寒い。中に入っていた方がいいんじゃないか？」

「寒いのは平気だ。風の音がうるさくて眠れない」

「おまえがそういう泣き言を言うとは思わなかったぜ？」

「ラウダナムのせいだ。耳と目がやたらに良くなる。いまの私はあなたより、いい目をしている」

「耳と目が良くなりすぎたって、悪いことはねえだろう？」

「目はそれほど気にならないが、聞こえなくてもいいものが聞こえる。ガルビア半島が落ち着かない。私たちが乗り込んできたせいだろう。一帯がざわめいて、うるさくてかなわない」

「そう言いながら、彼女は子どものように首を振った。

「一帯って、ガルビア半島は広いんだぜ。どこまで聞こえるって言うんだよ？」

グランディーナはカノープスを睨みつけたが、すぐに目をつぶった。

その眼差しに浮かんだのは恐怖だとランスロットが思った時、彼女は目を開け、南の方を振り返った。その動きに二人もつい、つられる。

しかし、彼女たちの周りには雪と風があるばかりで帝国軍さえない。ラシュディの護衛という名目でガルビア半島にやってきたフィガロ将軍も、どこまで

従ったのか疑問が残るところだ。

「すごいな、プロミオスは」

「え？」

彼女が少しだけ得意そうに微笑んだ。

「フレアブラスのおかげで戦闘が楽だ。デボネアたちは今日中にエルテルスンドを解放するだろう」

「エルテルスンドってどこだ？」

「確か、ガルビア半島の真ん中辺りだと思ったが、ここから百バーム以上離れているはずだ」

グランディーナは耳から手を離し、剣を抜いた。雪の上に描く地図はすぐに隠されてしまい、ランスロットにもカノープスにもいつも以上にわかりにくい。

「そんな遠くの声が聞こえるっていうのか？」

「知った声をかろうじて拾えるという程度だ。意識しなければ聞き分けられない。それに、ほかの声や音がうるさくて、一緒になつてしまうことの方が多い」

「そいつは、俺よりいいとかつて類の話じゃねえぞ。いくら良かったって百バームも離れたところの音なんか聞こえるものか」

彼女は剣を取め、また耳に手を当てた。そんなことをしても、どれだけ効果があるかは疑問だが、そうせずにいられないのだろう。

「俺たちの声も埋没するっていうのか？」

「あなたたちの声はもつと大きい。でも内緒話をされたら、どうかかな？」

「いまからガルビア半島を離れるわけにはいかないのか？」

彼女は即座に首を振った。

「別に初めてのことじゃないし、痛みが治まれば、ラウダナムは飲まなくても良くなる。それにガルビア半島の次は天空の島だ。離れる意味はない」

「だがサラデイン殿はしばらく動かさせないだろう。そのあいだにデボネアの方が片づくのじゃないか？」

「そうだな」

答えてから彼女はしやがみ込んだ。

「グランディーナ、いくら寒さは平気だからって、あんまり長時間、外にいるのは良くない。考え事をするなら天幕に入ろう」

「そうする」

いつもより、やけに彼女が素直なのも気になる。

戻ると、アイーシャが起き出して、サラデインの世話をしていた。すぐに横になってしまったグランディーナも、甲斐甲斐しく面倒を診る。

しかし、彼女はすぐに眠ってしまわず、しばらく考

えてから、こう言った。

「ランスロット、カノープス、あなたたちのうち、どちらかスツツバルまで戻ってくれないか？」

「おまえたちはどうするんだ？」

「食糧は足りる。私たちはここで皆が来るのを待つ。その方がサラデインも早く回復するだろう」

二人は顔を見合わせた。どちらかというなら話は決まっている。カノープスの方が絶対的に移動は速いからだ。

「だけど、ガルビアまで行つたデボネアたちを待つていたら、ずいぶんかかる。いくら食糧があるからといって、ずっとここにいるのは厳しくないか？」

グランディーナはアイーシャを見たが、彼女もランスロットの言葉に頷いて、続けた。

「いくら暖めても天幕では限界があります。サラデインさまが歩けるようになったら、すぐにスツツバルまで戻つた方がいいと思います」

さすがのグランディーナも、アイーシャの言うことには滅多に反抗しない。

「サラデインの容態は？」

「明日になれば出発できると思います。もちろん戦闘は回避しなければなりません」

サラディンは何も言わなかったので、グランディーナはアイーシャの言葉を吟味しようだが、とうとう同意した。

「わかった。ここはあなたたちの言うようにしよう。明日、スツバルへ戻る」

グランディーナたちがスツバルに戻った雷竜の月十三日、デボネアとラウニーの隊はベルゲンを解放し、ファイガロ將軍の待つガルビアを目と鼻の先に捉えていた。

ライアン率いる小隊は町の解放には携わらないので一行より先行している。それはすなわち、ガルビアを発つ帝国の守備隊に、フレアブラスの先制を喰らわせるためでもあった。

もちろんデボネアたちはベルゲンに留まらず、そのままガルビアを目指した。明日にはガルビアに着き、ファイガロと対面できるはずだ。

ガルビアを目前にして、デボネアはラウニーたちの小隊も集めると、自身の決意を話した。

「ファイガロはわたしに説得する。彼の気持ちを変えられない時は、わたしの命に替えても彼を倒そう」

「彼は四天王のなかでもいちばん剣技に優れた人だ

と聞くわ。あなた一人で大丈夫？」

「お任せを」

ラウニーもノルンも、皆が心配そうな顔をしたが、止められるはずがなかった。

翌雷竜の月十四日、デボネアたちはガルビアの手前でライアンと再会した。

「こんなところでどうしたんだ？」

「敵さんもあらかた出尽くしたらしい。どうする？俺たちもガルビアまで行くかい？」

「いや、君は先に戻れ。残っているのがファイガロだけならば、君たちの役目は終わりだろう。それにファイガロにはわたしだけ会うつもりだ」

ライアンは考えたようだが、ラウニーが頷いてみせた。

「朗報を待つてるぜ！」

雪続きでブラックドラゴンに疲れているようだが、プロミオスは反転し、どんどん進んでいった。

二四年前の大戦以前、ガルビア半島は温暖な気候で、冬の避寒地として大勢の貴族やマラーノの商人のための別荘などがあつた。ガルビアはそれらがいまま残る町

で、ラシュデイの使った禁呪のために気候が激変した後、町の機能を維持し続けている。

フィガロ將軍はガルビアでもいちばん大きな館を接収したという。ラシュデイ不在の後、彼がなぜ、いつまでもガルビアを離れないのか、不審に思っていた帝國兵もいた。

デボネアはその館の前でノルンやラウニイーと別れた。入り口に立つ兵士は、彼がクアスⅡデボネアと名乗ると、大層驚いた様子だった。

「ですが、デボネア將軍はゼノビアで反乱軍に殺されたのでは？」

「わたしは生きて、ここにいます。わかつたら、フィガロに取り次ぐがいい。デボネアが迎えに来たとな」

兵士は疑い深そうな眼差しを彼に向けたが、さすがに四天王の顔は知っているらしく、ようやく合点すると館に入ってしまった。

幸い、フィガロが出てくるまで、デボネアはそれほど待たされずに済んだ。

「お、おまえはデボネア！ 生きていたのか！」

「久しぶりだな、フィガロ。迎えに来たぞ！」

「なぜおまえが反乱軍にいる？ 迎えに来たとほどういう意味だ？」

「いい加減に目をさませ！ 帝國はすでに終わりでだ！」

「ばかな。裏切ったのか！ ハイランドを裏切ったのか!!」

「陛下はすでに、われらが知っている陛下ではない。国内を見よ！ 民のほとんどはその日の食事にすらありつけず、飢えのために死んでいく。そのくせアプローズのような下賤なやからが私腹を肥やし、われらの名誉を傷つけているのだ。われらハイランドが目指すは、力で人心を支配する霸道ではない。暗黒の力を欲してはいないのだ」

「剣を抜け。剣を抜くのだ、デボネア!! わたしはエンドラ陛下に忠誠を誓った。終生、仕えること誓ったのだ。信念をまげるわけにはいかない。わが名誉にかけて、四天王の誇りにかけてデボネア、おまえと戦おう！」

先手を取ったのはフィガロだった。四天王一の剣技と評された速さは伊達ではない。迷うことのない太刀筋も、デボネアがよく知るフィガロのものであった。

彼の速さを後押しするのが、ヒカシュー大將軍から贈られた名剣デュランダルである。

しかしデボネアはこれを捌き、^{さば}凌いだ。

かつてともに剣を競い、技を競い、心身の鍛練をも競い合っていた親友たちは、いま、真つ向から対立していた。

デボネアが反撃する。その手にヒカシュー大將軍から贈られた名剣ソニックブレードはない。ゼノビアで解放軍に破れ、女帝の真意を確かめようと、逃げ戻ったゼテギネアで取り上げられてしまったからだ。解放軍の在庫にも名だたる銘刀もなく、デボネアは刀身がソニックブレードに似た無名の剣を選んだのだ。

その太刀筋はフィガロの知るデボネアのものとは違つたらしく、彼は戸惑つたような顔をする。

「おまえは本当にデボネアか？ 反乱軍で何を吹き込まれてきた?！」

「吹き込まれたのではない、自分で気づいたのだ。いまの帝国の在り方は間違つている！ このままでは国にも民にも未来はない!」

二人は激しく打ち合った。かつてそうしたように、互いを最高の好敵手と認め、ともに競い合つたように、その戦いには誰も入ることなどできなかった。

だが打ち合うたびにフィガロはデボネアの剣に知らないものを認めている。それだけで鈍るような剣技を彼は持つていないが、フィガロにとつては認めがたい

ことであるらしい。

「なぜだ、デボネア？ なぜ帝国を裏切つた?！」

「ならば訊こう、フィガロ。おまえはこのガルビア半島を見て何も感じないと言うのか？ マラノは見えないか、ゼノビアはどうだ？ 二四年前の戦が全ての始まりだ、ガルビアが恵まれた気候だつたことは、おまえの心には何も響かないのか?！」

「黙れ、黙れつ！ ラシユデイさまは神のごとく、いや、神以上の力を持つた偉大な魔術士だ！ あの方の魔力を持つてすれば天界の三騎士といえ、われらに屈服するに違いない。わからぬか、デボネア？ 我らゼテギネア帝国が半神たる天空の騎士さえ配下に置くことができるのだぞ!」

「それが何だと言う？ 半神を配下に置いたところで帝国の過ちが正される訳ではない！ 民は幸せになれない！ そもそもラシユデイが元兇であることになぜ気づかない？ フィガロ、四王国など滅んで然るべきだつたとも言つてもいいか?！」

「そうだ。我々にはエンドラ陛下がいらっしゃる、この大陸はエンドラさまの下に統一されるべきなのだ。わたしは四天王位をお受けしたあの日、陛下のために尽くすと誓つた。エンドラさまのおられるところがわ

たしの正義だ、陛下の創られる未来がわたしの守るべき道だ！」

二人はさらに打ち合った。だが、もはや互いの心が通い合うことはない。剣によって互いに高め合った二人の道は、こんなにも遠く分かれたってしまった。

いつからだ、とデボネアは自問する。ともに四天王に選ばれたあの日、二人が見ていたものは同じだったはずなのに、いつからこんなに遠ざかってしまったというのか。

自分がゼノビアに左遷された時か。

それとも同じものを見ていたと思ったのは自分の勘違いで、二人が見ていた未来は最初から違っていたとしても言うのだろうか？

すると、ファイガロが後方に下がった。このまま打ち合っても決着はつかない。大技ダウンクロウズを放つつもりだ。ドラゴンさえ一撃のもとに屠ってしまった彼の必殺技を、かつての親友に向けようとしている。

しかしデボネアも剣を最上段に構えた。ファイガロの技には劣るが、自分にもソニックブレイドという大技がある。技には技で返すのが剣士としての礼儀というもの、そうと気づいてか、ファイガロも笑みを浮かべた。「おまえは一度もわたしに勝っていない。しかもそ

んな剣で我がダウンクロウズを受けようというつもりか？」

「誓ったのだ、わたしは」

デボネアの言葉にファイガロの手がわずかに動く。

「この剣でゼテギネア帝国を倒すと、わたし自身にソニックブレイドを手放して、わたしは自分が剣の力に頼り、振り回されていただけだったことに気づいた。だから、わたしはいまこそ、わたし自身だけの力でおまえと戦おう」

「良い覚悟だ、デボネア。だが覚悟だけで我が技を受けられぬことを命をもって教えてやる！」

ダウンクロウズとソニックブレイドは真正面からぶつかり合った。互いの技が互いに襲いかかった時、最後まで立っていたのはデボネアの方で、ファイガロではなかった。

「クアス！」

「デボネア！」

遅れて膝をついたデボネアに、ノルンやラウニイが駆け寄ってくる。

戦いは相打ちにも見えた。

だが二人とも血反吐を吐いたものの、より重傷なのはファイガロの方であった。

「ノルン殿、ラウニイー殿」

彼はつぶやき、顔を歪める。笑おうとしたのかもしれなかった。打ち合った時の手応えから、デボネアは彼に致命傷を与えたものと確信していた。

「おまえには心強い仲間がいたのだな、デボネア」

「何を言う、おまえもその一人じゃないか。いまからでも遅くない、ともに戦おう、ファイガロ！」

彼は親友の手を握ったが、力は急速に失われてゆく。だが、ファイガロを助けるために手を抜けば、二人の立場は逆になっていただろう。そしてこの対決の時に力を惜しんだデボネアを、彼は激しく罵り、嫌悪したに違いない。

真つ直ぐな気性で剣士として己を高めることばかり考えていたファイガロは、相手に手を抜かれることを何よりも嫌っていた。

そして二人に限らず、剣士が全力で打ち合えば、どちらか、あるいは両方が倒れることは必須だ。わかっていても避けようのないことだったのだ。

「デボネア。わたしはわたしの信念をつらぬいた。

おまえはおまえの信念をつらぬくがいい。この剣を、受け取ってくれ」

「もういい、しゃべるな。しつかりするんだ、ファイ

ガロ！」

「私に、かまうな！ 陛下を、陛下を頼む」

「死ぬな!! ファイガロ！ 死ぬんじゃない」

親友の形見、名剣デュランダルを手に、デボネアはしばらく動かなかった。否、動くことができなかつた。ようやくノルンが彼の肩に両手を置き、背に頬を寄せた。

「クアス、もう日が暮れてしまいわ。今夜はここに泊まらせてもらって、明日、戻りましょう」

ラウニイーも口を挟む。

「そうね。ファイガロはここに埋葬するしかないわね。あなたたちも手伝って！」

彼女が率先して穴掘りを始めたので、不承不承ながら、ステイングたちも手伝った。ノルンだけ館に入っていたが、最後にはデボネアも手を貸したので、暗くなる前に何とかファイガロを収められるだけの墓穴が掘られた。

皆が館に入っていつてから、デボネアは改めてファイガロの墓前に誓いを捧げた。

「ファイガロ、陛下はもはやわたしたちの知っていた陛下ではない。暗黒道に傾倒した女王、それがわたしが最後にお会いしたエンドラさまだ。だがおまえの剣

にかけて誓おう。わたしは陛下の魂をお救いすると。この国と民の未来を切り拓くために戦うと。それまでどうか、わたしたちの戦いを見守っていてくれ、それだけが不肖の親友に約束できるただひとつのことだ」

墓石もない墓の上に雪が降りしきる。その冷たさはハイランド出身のデボネアやラウニーたちにも格別なものであった。

フィガロ將軍の敗北は速やかに伝わり、要を失った帝国軍は敗走した。

帝国軍が来ることもなければ、ガルビア半島の動きはほとんどない。根雪のように時間も凍りついたこの地では、外界の動きにもほとんど関わりなく過ごすのである。

ゼテギネア帝国が倒されても、大きく歪められた気候がもつと柔らがない限り、ガルビア半島が変わることとはないだろう。二四年経つても禁呪の影響が薄まることはなく、それを解除することはもはや当のラッシュデイにも不可能なのだから。

デボネアたちの帰還を待つて、解放軍はカオスゲートより天空の島に至る。

そこにはオウガバトルの記憶をいまに伝える、天空の三騎士がいるのだ。